

縁起法頌再考

——註釈文献の紹介を中心に——

若 原 雄 昭

はじめに

佛教に於いて法門と呼ばれるものは数多いが、縁起法頌ほど佛教世界の全域にわたって広汎に流布し、また時代を越えて熱心な信仰の対象とされた法門はないであろう。⁽¹⁾法頌を刻した多様な各種考古遺物の報告は、殆どアジア全域に及んでいる。こうした、いわゆる法身舍利としての法頌の奉獻は入竺僧が克明に記録していることでも知られるが、⁽²⁾碑文資料によれば遅くともボストグプタ期にはインド各地で定着していたようである。⁽³⁾筆者は嘗てこのような法頌の呪的崇拜の背景に言及して、法頌を Paul Thime のいう真実呪 (Wahrheitszauber) の佛教的ヴァリエーションと見なす所論を披瀝し、また法頌信仰の拡がりの一端を紹介したことがある。⁽⁴⁾法頌に関する先行研究は相当の数に上るが、やはりこの方面からのアプローチが多い。⁽⁵⁾

一方で、かく周知の法門でありながら、法頌には種々の問題が指摘されていることも事実である。例えば、法頌は佛伝資料中の一箇所にしか見いだせず、⁽⁶⁾阿含・ニカーヤには実質的には一度も現れない。また、夙に柳亮三郎博士が論じられたように、サンスクリット文・パーリ文の既知のどの法頌もアーリヤー (āryā / ariyā) とされるその韻律の正則を満たさない。⁽⁷⁾更に、サンスクリット文、パーリを含むプラークリット文、諸漢訳、いずれも極めてヴァリエーションが多く、⁽⁸⁾本頌の原形の推定を困難にしている。その上、この頌がそもそも何を言おうとするのかが必ずしも明確ではないということが

ある。四諦を略説したものとする解釈が古くからあり、また縁起法頌と呼ばれるように縁起（特に十二縁起）を要約したものとも解されてきた。本稿では筆者が見いだした数点の法頌注釈文献を紹介し、法頌解釈の変遷を辿ってみたい。

I. 法頌と四諦説

法頌は当初、南北両伝に於て一般に四諦を説くものと見なされていたようである。法頌の locus classicus というべきは、パーリ律蔵大品大毘婆沙（受戒毘婆沙）中のサーリブッタ、モッガラーナの帰佛因縁譚である。⁽⁹⁾そこでは、よく知られているとおり、まだ異教徒サンジャヤの弟子であるサーリブッタが五比丘の一人アッサジに出会ってその威儀端正なるに打たれ、彼の師である釈尊の教説を知りたいと懇請したので、アッサジが躊躇いつつも法頌を誦す、ということになっている。ブッダゴーサ (Buddhaghosa, 5c.) の律蔵注釈 *Samantapāsādikā* によれば、法頌は四諦を説いたものであるという。律本文該当部分と注釈を以下に訳出する。⁽¹⁰⁾

さて、尊者アッサジは遊行者サーリブッタに次のような法門を説いた：

凡そ因生なる諸法と、それらの因を、如来は説かれた。

またそれらの凡そ滅なるものを。大沙門はこのように語られる方である。

と。この法門を聞いて、遊行者サーリブッタには無塵にして離垢なる法眼が生じた—「何であれ凡そ生じる性質を持つものは全て滅する性質を持つ」と。[律本文]

凡そ因生なる諸法、とあるが、因生なる、というのは五蘊のことであり、これによって苦諦を示す。それらの因を、如来は説かれた、とは、それらの因というのは集諦であり、それを如来が説かれた、ということを示す。またそれらの凡そ滅なるもの、というのは、それら生起した諦

の残りなき滅なるもの、であり、それをも如来は説かれたという意味である。これによって滅諦を示す。ここでは道諦はそれ自体としては示されていないが、文脈上は示されている。というのは、滅が述べられたなら、それを証得させる道も必ず述べられたことになるからである。或いは、それらの凡そ滅なるものを、というこの箇所では、それらの滅なるものと滅の方便なるものと、というように二つの諦が示されているのである。ついで、この同じ意味を表すために、大沙門はこのように説かれる、と云う。[ブッダゴーサ注]

この場合、法頌中に述べられる「因生の諸法」、「それらの因」、及び「それらの滅」を、それぞれ四諦のうちの苦・集・滅に相当すると見るのに困難はないが、問題は、ブッダゴーサも認めているとおり、道諦に相当する語句が法頌自体には存在しないということである。彼はこの難点を回避するために、三諦が説かれれば第四の道諦も文脈上 (nayatas) 当然理解されると云い、或いは法頌第3句の関係代名詞が導く従属文 (yo nirodho) に含みを持たせ、そこに滅を得る方便としての道 (諦) を読み込むという解釈を示す。

律自体の文脈をたどるならば、法頌の直後に、法頌を聞いたサーリプッタに「無塵にして離垢なる法眼が生じた…」と述べられているのが法頌解釈の鍵であることが判明する。これは同じ律藏佛伝記事の先行箇所でも語られる初転法輪の場面において、佛陀の最初の説法を聞いた直後の五比丘の一人一人について繰り返される著名な定型句である。その後も、続くヴァーラーナシーの青年ヤサの出家から、本挿話直前に入る王舎城でのビンピサーラ王と12万人のバラモン・長者の帰依に至る迄この定型句は頻出するが、いずれも佛陀から直接に四諦の教説を聞いた直後の場面である。¹⁰³つまり、佛伝においてはこの定型句は必ず初転法輪及びその主題である四諦を連想させる。したがって、このエピソードの叙述によって佛伝記事編集者が意図したのは、サーリプッタがアッサジの誦する簡潔な法門、しかも四諦の全てを明示的に述べるのではない不完全な若しくは含意的な法門、を聞いただけで、たちどころ

に初轉法輪と四諦説の意義を洞察したということなのであろう。とすれば、法頌はどうしても四諦を説くものでなければならないことになる。⁽¹³⁾

次に、やはり法頌に言及する基本資料として知られる大智度論の該当箇所を検討する。同論では二カ所で法頌が言及される。初めは卷十一で、単に舍利弗・目連の帰佛のエピソードを語る文脈であり、アッサジ（阿説示）が説いた偈として法頌が示されるのみで法頌については何の説明もない。⁽¹⁴⁾

爾時、阿説示比丘説此偈言一

「諸法因緣生 是法説因緣 是法因緣盡 大師如是説」

舍利弗聞此偈已、即得初道、還報目連。...

もう一つは卷十八で、經藏を理解するための様々な解釈法の実例として法頌を挙げ、法頌が四諦の初三諦を意味すると説明される。やや長文の引用になるが、先行文脈と共に以下に示す。⁽¹⁵⁾

諸佛法無量有若大海、隨眾生意故種種説法。或説有或説無或説常或説無常或説苦或説樂或説我或説無我。...。智者入三種法門、觀一切佛語皆是實法、不相違背。何等是三門。一者蜚勒門、二者阿毘曇門、三者空門。

問曰、云何名蜚勒、云何名阿毘曇、云何名空門。

答曰、蜚勒有三百二十萬言、佛在世時、大迦梅延之所造。佛滅度後人壽轉減、憶識力少、不能廣誦、諸得道人撰為三十八萬四千言。若人入蜚勒門、論議則無窮。其中有隨相門對治門等種種諸門。隨相門者、如佛說偈一

「諸惡莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸佛教」

是中心數法盡應説、今但説「自淨其意」、則知諸心數法已説。何以故、同相同緣故。...

如佛於四諦中、或説一諦或二或三。如馬星比丘為舍利弗説偈一

「諸法從緣生 是法緣及盡 我師大聖王 是義如是説」

此偈但說三諦、當知道諦已在中、不相離故。譬如一人犯事、舉家受罪。
如是等、名為隨相門。對治門者、如佛但說四顛倒、常顛倒樂顛倒我顛倒
淨顛倒。…。

同一論書中でありながら法頌訳文が前出箇所のと大幅な違いを見せること、またそこで阿説示と音写されていたアッサジがここでは馬星と訳されていること、いずれも本論の孕む問題点を示す例であるが、今は措く。先ず經藏解釈文獻は縮小されたとはいえ膨大であり、解釈方法も多種多様であることを述べた後に、その例としていわゆる七佛通戒偈と法頌を取りあげている。前者では、偈の文言には「自淨其意」としか述べられていないが、この「意」(citta)の語は実際には全ての心數法(心所法)を意味する、という。後者については、四諦を説く場合にも經に四諦の全てが明示されているとは限らず、一諦の場合もあれば二諦或いは三諦の場合もあるとして法頌に言及する。そして法頌は三諦のみを説いているが、道諦は不可分なものとしてそこに含まれているとし、一人が罪を犯せばその一家の者が皆罪に問われるという譬えを示している。法頌を含意的な法門(隨相門)と見る点で、前述のブッダゴーサと基本的には同様の解釈と言えるであろう。

これら二次文獻に見られるような、法頌が四諦を説くものとする解釈が、どこまで遡れるものか必ずしも明らかではない(上註¹⁰参照)。但し、これに関わる興味深い例としてブッダチャリタ *Buddhacarita* 中のサーリプッタ(同書中では *Śāradvatīputra*) 歸佛の件りがある。そこでは、彼にアッサジ(同じく *Aśvajit*) が次のように答える。

「何であれ諸法は因相より生じるのであり、それらの因相を世尊は説かれた。

またそれらの滅なるものと、その滅の方便なるものをも説かれた」

(第17章第8偈)¹⁰⁸

これが法頌に相当するものであることは明らかであるが、第四句において「滅の方便」という表現で道諦に言及していることが注目される。同偈に対応する諸漢訳を訳出年代順に挙げれば以下の通りである。

覺苦苦起無 又知苦所滅 所以苦滅道 聖師所頒宣 (佛本行經卷四)
 一切有法生 皆從因緣起 生滅法悉滅 說道為方便 (佛所行讚卷四)
 諸法因生者 彼法隨因滅 因緣滅即道 大師說如是 (佛本行集經卷四八)⁽¹⁹⁾

三訳のいずれの原典にも道もしくはその相当語が存在したことは確かであり、特に古訳の佛本行經は晦渋ではあるが四諦の全てを明示的に述べている。作者アシュヴァゴーシャ (Aśvaghōṣa 馬鳴) の時代、遅くとも 2 世紀前半、には既に法頌が四諦を説くとする一定の共通認識があったものと推定される。尤も、このように法頌に四諦が明示されてしまうと、サーリプッタの英才ぶりを印象づける効果は多少薄らぐことになる。

以上見てきたとおり、佛伝資料の当該文脈においては法頌は四諦を(含意的に)述べたものと解釈するのが妥当である。そして、経蔵律蔵を通じてこの箇所以外に法頌は見いだされないのだから、他の解釈の余地はないように思われる。現在までに発見されている法頌碑文資料の最古例が何れも初転法輪の地サルナート出土であることも、これを補強するものである。法頌刻文の慣わしはサルナートで始まったのではないだろうか。

II. 敦煌出土チベット訳「緣起頌」注釈文献

これに対し、おそらく時代的には下るが、法頌が十二緣起説を要約したものと明言するインド撰述の註釈文献が何点か存在する。法頌関連チベット訳文献は相当数あり、まだ網羅的な調査を終えていないが、これまでに特に筆者の関心を引いたものが二点ある。先ずスタイン・コレクション中に含まれる一点を紹介する。現存する法頌註釈文献の中では最も詳しく、時代的にも

おそらく最も早いであろう。

Stein No. 127 & 128 ウィナヤヴァルマン作「縁起頌釈」*rTen cing 'brel par 'byung ba'i tshig su bcad pa'i rnam par bshad pa* (Pratitya-samutpāda-gāthā-vyākhyāna)²³

Stein No. 127, Ch. 9.I.2., 2-1-34a~37b (041~045) [以下A本と呼ぶ] 59.5cm×7.5cm；有頭字体 (dbu can)，各葉4行，4葉の完本。各葉裏面左端に葉番号gchig(1)~bzhi (4)が記され，表面左端に別の葉番号 tsa (17)，tsha (18)，dza (19)，va (20)及び題名の略称 *rTen 'brel tshig su bchad pa* が記されている。プーサン目録によれば註釈文中に引かれる法頌の語句は朱書されている由であるが，モノクロマイクロフィルムからのプリントでは判読できない箇所が多い。

Stein No. 128；Ch. 9. I. 31；2-1-38a~40b (046~049) [以下B本と呼ぶ] 45.3cm×6.4cm；有頭字体，各葉5行，最終葉を欠く3葉の不完本。各葉表面左端に葉番号 so brgyad (38)~bzhi cu (40)が記される。註釈文中に引かれる法頌の語句はやはり朱書されているようで，殆ど判読できない。行間に無頭字体 (dbu med) の細字で若干の注釈らしき書き込みが見られるが，これも判読不能である。

完本であるA本を底本とし，B本の異読を付記したテキストを作成し注記に示した²³。敦煌文献特有の古い綴字法はA本の方にやや多いように思われるが，これが二写本の時代的先後を示すものかどうか筆者には判断がつかない。冒頭に掲げられた法頌（「縁起頌」と呼ばれている）と，その後続く注釈とが，一体となった文献であるが，注釈対象とされている法頌のサンスクリット原文が同頌の多くのヴァリエーションのどれに該当するかは，厳密に言えば不明である。ここでは，Skilling 博士が，サンスクリット文の法頌として「インド及び古代仏教世界で最も広く流布したヴァージョンで，多様な碑文やパーラ朝写本のコロフォンに見いだされるもの」とする例を，訳文の下の [] 内に示しておいた²⁴。注釈の訳文中で下線を施したのは，写本で朱書されている法頌引用箇所である。

コロフォンによれば、著者である軌範師ヴィナヤヴァルマン (*Vinayavarman) は正量部 (Kun gis bkur ba'i sde pa; Saṃmatīya / Saṃmitīya) に属するという。この記述が正しければ、小品ながら正量部の文献が新たに一点加えられたことになる。

<試訳>

インド語で *Pratītyasamutpāda-gāthā* [縁起頌]

チベット語で *rTen cing 'brel (d) par 'byung ba'i tshig su bcad pa'*

[同]

凡そ因生なる諸法、それらの因、及びそれらの凡そ滅なるものを、
如来のみが説かれたのであり、如是に語られる方は大沙門である。

[ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgato hy avadat //
teṣāṃ ca yo nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ //]

インド語で *Pratītyasamutpāda-gāthā-vyākhyāna* [縁起頌釈]

チベット語で *rTen cing 'brel par 'byung ba' i tshig su bcad pa' rnam par bshad pa'* [同]

一切智者に帰命す。

軌範師世親を初めとする古の軌範師たちが、菩提の証得に資する縁起の義釈をなさっているから、新たに説くべきことは何もない。しかしながら、鈍根の人々を益するように、また私自身の心覚えのために、縁起の釈を著そう。

<第一釈>

凡そ因生なる諸法、云々について。凡そ (関係代名詞 *yad*) とそれ (指示代名詞 *tad*) との二 (語) は常に相関するものだから、(頌中の)
それらのという語と結びつき、また (頌中にない) それらという語とも結びつく。説かれた、という動詞 (**kriyāpada*) が述べられているのは、(頌中にない方の) それらという語に関係づけられる。したがって、

句の意味は、凡そ因生なる諸法、それらを如来は説かれた、ということになる。

因生なる、つまり因より生じたということであり、果である五取蘊⁰⁷という意味である。これによって、苦諦と、それを無常・苦・空・無我の行相(*ākāra)によって修習すべきであるということとが示されている。⁰⁸「苦を遍知せよ」と(經典に)説かれるからである。どうしてこれによって無常などの行相も示されたことになるのか、というと、「因より生じたところのものは無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは空である。空なるものは無我である」と説かれるからである。

それらの因、とあるうち、それらのとは苦を自性とするものの、である。因(hetu)とは原因(*kāraṇa)であり、集(*samudaya)という意味である。それらの因は後有愛(*paunarbhāviki tṛṣṇā)という喜貪(*nandirāga)を伴っているのである。ここでも、先の句の中にある、凡そ(関係代名詞 ye)という語に関係づけられ、凡そ(関係代名詞)とそれ(指示代名詞)の二(語)は相関するから、それ(ら)という語と結びつけるべきである。だから、意味としては、凡そ因なるもの、それらをも如来は説かれた、ということが述べられているのである。⁰⁹これによって、集諦と、それを集・因・生(*prabhava)・縁(*pratyaaya)の行相によって修習すべきであるということとが示されている。「集を永断せよ」と説かれるからである。どうしてこれによって集などの行相も示されたことになるのか、というと、それは不可離の関係(*avināva-hāva)にあるので、因という行相を説けば集などの他の行相も説かれたことに必ずなるからである。

及びそれらの凡そ滅なるものを、という箇所でも、(句中の凡そという関係代名詞yoは)それ(指示代名詞)という語に関係づけられるから、意味は、凡そ滅なるもの、それをも(如来は)説かれた、ということだと知るべきである。これによって、滅諦と、それを滅・静(*śānta)・妙(*praṇīta)・離(*niḥsaṛaṇa)の行相によって修習すべ

きであるということが示されている。「滅を直証せよ」と説かれるからである。静などの行相は（頌中に）説かれていないのに、それがどうして解るのか、というと、それは不可離の関係にあるので、滅という行相を説けば静などの他の行相も説かれたことに必ずなるからである。

如是に語られる方は、とあるうち、如是 (evam) という語は同様に (tathā) という意味である。そして、同様にという語は、～のように（從属接統詞 yathā）という語と相関するから、意味は、苦諦の因を説かれたように、同様に滅を証得する因をも説かれた、ということだと知るべきである。これによって、滅を証得する因である道諦も正に説かれているのであり、それを道・如 (*nyāya)・行 (*pratipatti)・出 (*nairyāṇika) の行相によって修習すべきであるということが示されている。「道を修習せよ」と説かれるからである。道・如・行・出の行相は（頌中に示されていないのに）どうして解るのか、というと、それらは道諦と不可離の関係にあるので、後者を理解すれば前者も理解したことに必ずなるからである。或いは、滅には（滅と道との）二義があると知るべきであって、この道によって業と煩惱を滅するから、滅でもあり道諦でもある、という意味である。

世尊は沙門法を具えているから沙門であって、全ての沙門の中で最勝であるから大 (沙門) という。

これらによって、苦とその因、及び滅と（それを）証得する因が説かれているから、世尊が四諦を説かれたということが示されている。ここで、（四諦が）現觀 (*abhisamaya) の順序によって（示されて）いて、生起 (*utpatti) の順序によってではないのはどうしてか。これにより、菩薩行を行じる行者は、常などの十六行相 (*ṣoḍaśākāra) の対治 (*pratipakṣa) である無常などの十六行相によって四聖諦を修習すべきである、³²ということが述べられているのである。

<第二釈>

この頌の意味は異なった解釈も出来る。凡そ因生なる諸法、それらの

因、というのは、雑染の十二支縁起を説かれるのである。及びそれらの凡そ滅なるものを、というのは、清浄の縁起を説かれるのである。如來のみが説かれたのであり、というのは、彼以外の者が説くことを否定して如來だけが説かれたということを示す。そして、如是に語られる方は大沙門である、というのは、世尊が無顛倒を語られる方であり、福德と智慧の資糧を円満されているから最上者であるということを示す。以上が総括的な意味である。

各句の意味を説明しよう。(関係代名詞) yadと(指示代名詞) tadの二(語)は常に相関しているから、(第一句の)意味は、凡そ因より生じた諸法、それらを如來は説かれた、ということである。それら諸法とは何か、また諸因とは何か?このうち、先ず、これらの諸法とは七であり、七とは何々かといえ、識・名色・六処・触・受・生・老死である。これら七法は、生雑染(*janmasaṃkleśa)なる果である。それらの相は他書で解説されているから、長文になることを憚って今は説明を省く。諸因とは何かというと、無明・渴愛・取・行・有のこれら五が諸因である。このうち、無明・渴愛・取は惑雑染であり、行・有は業雑染である。これらの諸因より生じるから、因生なる諸法、それらの因、という因とは原因(*kāraṇa)のことである。それらというのは七法と五因である。

他の者が「これら七法と五因の因は何か?」と問う。この問難の主旨は、「十二支分以外の因は述べられていないし、述べたとしても無限遡及となるから、これら七法と五因の因はないことになる」ということである。

だからこそ、世尊が縁起輪廻を、「惑(*kleśa)から惑が生じる、つまり渴愛から取が。惑から業が生じる、つまり取から有が生じ、また無明から行が生じる。また、業から事(*vastu)が生じる、つまり行から識が、有から生が。また、事から事が生じる、つまり識から名色が乃至触から受が、そして生から老死が。また事から惑が生じる、つまり受から渴愛が。」という設定(*vyavasthāna)によって示されたのである。

諸有支 (*bhavāṅga) はこのような道理 (*naya) で設定されているから、無明などの惑と業と事との自性と、事・業・惑 (のそれぞれ) から (それぞれが生じるということ) とが説かれていることになる。したがって、他の支分は述べられていないから無限遡及になることもないし、この中に七法と五因とを生じさせる因がないことにもならない、と確定された。⁸³

また、(頌中の) 因 (hetu) という語は不変法辞 (*nipāta) であると解釈する軌範師たちがいるが、彼らは縁起輪廻を説かないから、そしてそれを説かない故に他の者たちの問難に答弁することも出来ないから、何も言わないに等しい。⁸⁴

及びそれらの凡そ滅なるものを、という句でも、(関係代名詞は) それという語に関係づけられるから、意味は、凡そ滅なるもの、それも説かれた、ということである。滅と寂靜と涅槃と解脱とは同義語である。これによって、清淨の縁起の相が説かれた。清淨の相は如何に説かれるのかというと、世尊は、「無明の滅によって行が滅し、乃至、生の滅によって老死が滅し、そしてこれら純然たる大苦蘊が滅する」と、清淨品 (*vyavadānapakṣa) を廣説されたのである。

如來のみが説かれたのであり、という句について。如來とは他の正等覺者たちが説かれた如くに、その如くに説かれるから如來というのである。説かれた、というのはお説きになった、という意味である。

如是に語られる方は、というのは、つまり、この方は説法を常とされるからである。大沙門である、というのは、最勝 (*pradhāna)、最上 (*uttama)、最妙 (*vara)、最尊 (*śreṣṭha) という意味である。沙門 (śramaṇa) とは、惡 (*pāpa) を静めている (*śānta) から沙門⁸⁵であり、或いは煩惱・随煩惱を静めているから沙門⁸⁶というのであって、如來、阿羅漢、正等覺者なる方、という意味である。

この二通りの注釈について、或る者は論難する—「注釈とは聖教 (*āgama) と正理 (*yukti) の二つにもとづいて著述すべきもののなの

に、どうして正理を述べないのか」と。論理学者たちが他書で四聖諦などを証明する正理を既に説いているから、ここでは長文になることを懼れて述べないのである。同じ理由で、世尊も縁起を略説によって説かれたと知るべきである。

これを説いてどうなるのかというと、観行自在 (*yogesvara) たちは縁起を聞思修する順序により煩惱と随煩惱を習気を伴う所依から断じるのであり、久しからずして菩提を証得する。それ故に、四聖諦の修習と縁起の修習の為に努めるべきなのである。

縁起頌釈 正量部ヴィナヤヴァルマン軌範師の著作 了

以上のように、この注釈文献は初めに法頌を四諦説として解釈し、次いで十二縁起説で説明する。前者では、法頌に道諦が含意されているとする点は前節で紹介した二文献と同様であるが、第4句の如是 (evam) にそれを読み込む注釈法は特異である。後者は法頌をいわゆる流転分と還滅分の十二縁起を説くものとして解釈している。

二釈とも分量的にはほぼ等しく、最後には四諦と縁起の修習に励むよう勧めて論を終えているから、法頌の趣旨は四諦と縁起の両方に通じるものと見るのであろう。但し、法頌が「縁起頌」と呼ばれており、冒頭でも縁起の注釈を著すと明言されているところからすれば、第二釈を本義とするもののようなのである。これに関して、第一釈で法頌が四諦を説くものとしながら舍利弗帰佛因縁にも初転法輪にも全く言及しないことが注意される。諸部派が共通して伝承する佛伝中の著名なエピソードと法頌との関連が完全に見失われていたとも思われないが、少なくとも、既に法頌が「縁起頌」*Pratityasamutpāda-gāthā* 若しくは類似の名称で独立したテキストとして広く流通していた状況が背景にあることを推測させる。次節に示すとおり、後には法頌は専ら十二縁起説で解釈されるに至る。

全体を通じて俱舍論にもとづくところが多く、四諦及び十二縁起の解釈も基本的にはその祖述、摘記のように見える。また唯識説を思わせる箇所も散

見する。著者の所属部派とされる正量部の学説をどこに伺うべきか判然としない。周知の如く、正量部は世親が俱舍論破我品で厳しく批判した犢子部の分派であり、その世親が冒頭に権威として名指されていることも併せて、コロフォンに記された著者の部派帰属を信用することを躊躇させるものがある。

III. 法頌註 *Ye-dharmā-ṭikā* 二篇

次に、もう一点のチベット訳法頌注釈文献 *Ye-dharmā-ṭikā* を、カトマンドゥで筆者が入手した同名のサンスクリット文献と併せて紹介したい。どちらも法頌をいわゆる三世兩重の十二縁起を説くものとして説明する小篇である。

- 1) Tohoku No. 4149 シャーシュヴァタヴァジュラ作「法頌註」 *Ye dharmā'i 'grel pa* (*Ye-dharmā-ṭikā*)

<試訳>

インド語で *Ye-dharmā-ṭikā* [法頌註]

チベット語で *Ye dharmā'i 'grel ba* [同]

佛に帰依す。

さて、「凡そ因生なる諸法」(*ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ*) 云々 (の法頌) によって、相続を確固たるものとするために定説を説かれたのであり、注釈者たちに対しても説かれているのである—

経と瑜伽の、家に入る中に、

ye dharmā 云々の [法] 頌によって、佛の定説の印が捺される⁹⁸。

と。そして、この *ye dharmā* 云々 (の法頌) は、チベット語では、

凡そ因生なる諸法、それら、

また (それらの) 因を、またそこにおける凡そ滅なるものをも、

如来のみが説かれたのであり、

そのように説く方は大沙門である。

である。

凡そ因生なる諸法という中で、凡そとは周知の七（法）であって、無明を初めとする鉄鎖によって廻らされた（輪廻の）輪は因と果を自体としているのである。それらとは、惑と業と苦の三支分と、二と七の区分によって、三ともなるのであって、無明に始まる、と佛のみが説かれたのである。無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死、の十二である。無明とは貪・瞋・癡を自体とするものである。行とは過去の業である。識とは入胎（*garbhāvakrānti）である。名色とは羯刺藍（*kalala）等の五（位）である。六処とは眼等を意味する。触とは境と根と識の和合である。受とは楽等を自体とするものである。愛とは淫貪（*maithuna-rāga）である。取とは好ましい対象に対する執着である。有とは未來（世）の有という果をもたらす業のことである。生とは更なる蘊の結生である。老死は自明である。第一と第八と第九が惑である。業は第二と第十である。残りの七が苦である。それは三に摂せられるので十二が諸法である。三より三が、二より二が生じ、七より七が生じるから、そのみが輪廻の輪の因と果であり、一切の趣であって、ここに如何なる別の衆生も存在しないのである。空にして電光の如き諸法より空なる諸法が生じるのであって、習誦や灯火の如きものが因より生じるという意味である。

またそれらの因を如来のみが説かれたのであり、とは、それを直証された（*adhigata）如くに（*tathā）お説きになるからであって、不虛に説かれるから、輪廻の因と縁とを説かれるのである。

またそこにおける滅なるものをも、とある中の、をも、という語によって、まさにその因を、及び（滅を）、という意図で説かれたのであって、十二支分の滅を相とする諸佛の涅槃をも説かれたのである。分別された双運（yuganaddha）の樂は、空華（の如き都無）ではなくて、無心なる無生物ではないことを自性とする。

そのように説く方は大沙門であるとは、双運を説く方、正等覚者であ
⁽⁴⁹⁾って、不転倒に説かれる最上の婆羅門である。

これはシャーシュヴァタヴァジュラ阿闍梨が説かれたのをションヌが
 訳したものである。

残念ながらよく理解できない箇所が幾つかあるが、惑・業・苦に三分する
 十二縁起解釈の内容や、行文、そして用いられる譬喩から、一読して明らか
 に龍樹の因縁心論の影響が看取される。⁽⁴⁰⁾

2) カトマンドゥ新出「法頌註」*Ye dharmā-ṭikā*

紙写本、29×12.5cm、一葉、Devanāgarī 文字で表面 7 行、裏面 6 行に亘
 り本文が記され、行間には十二縁起各支分の順や余白注記を示す数字が、周
 囲の余白には（本文と別の手で）細字の詳細な注記が、書き加えられている。
 コロフォンを欠くため著者、年代ともに不明である。筆者は十数年以前から
 写本調査のためにカトマンドゥを度々訪れる機会があり、その際に当時
 Tribhuvan 大学に新設された佛教学科の科長を務められる Naresh Man Ba-
 jracharya 教授の知己を得た。同教授との会話の中で筆者が予てより法頌に
 関心を抱いていることを告げたところ、この文献の存在を教示下さり、写本
 のコピーを恵与された（本稿末尾に付した図版がそれである）。後に同名文
 献の写本が NGMP(/C)P, E 1260/26 (Running No. E 25319) *Ye dharmā*
⁽⁴⁹⁾*ṭikā*としてマイクロフィルム化されていることを知り、入手して確認した結
 果、本文は同一であることが判明した。⁽⁴⁰⁾以下に試訳を示すが、訳文には写本
 にある行間の数字や余白の注記を反映させている。

<試訳>

オーン、佛陀に帰依す。

凡そ因生なる諸法、それらの因を、如来のみが説かれた、

そしてそれらの凡そ滅なるものをも。このように説かれる方は大沙

門である。

これを解説しよう。

諸法とは幾ばくのものかという、七法である。①識（第三支）、②（五蘊なる）名色（第四支）、③六処（第五支）、④（六種の）触（第六支）、⑤（六種の三）受（第七支）、⑥生（第十一支）、⑦老死（第十二支）、である。これらが七法である。因生とは、諸原因により生起するからこう言われる。

因とは幾ばくのものかという五因である。①無明（第一支）、②（六種の）愛（第八支）、③（四種の）取（第九支）、④（三種の）行（第二支）、⑤（三種の）有（第十支）、である。これらが五因である。

如来のみが説かれた、とは、それら七つの諸法には五つの諸因があることを如来のみが説かれたのである。過去、現在、未来の（仏たち）が既に来たり、現に来たりつつあり、やがて来るであろう如くに、その如くに来るから、即ち知るから、如来と言われる。のみ (hi) という語は限定を意味し、声聞や独覚によって教示されたのではなく、ただお一人だけ、ということである。佛に関わる悟りだからである。

そしてそれらの凡そ滅なるものをも、とは、それら諸法と諸因を、滅すること、即ち寂滅・涅槃であり、解脱である。

このように説かれる方とは、このように説くのを常とされる方であるということである。大沙門の大とは最勝、最上、最妙、最尊を意味する。沙門とは、悪を滅除 (śam) し煩惱・随煩惱を滅除した方であるので沙門 (śramaṇa) と呼ばれる。如来、阿羅漢、正等覺という意味である。

世尊が教示されることは直証され説かれるべきである。彼は老死・悲・苦・憂・惱から解放される。それに捉われているから、ここで努力しなければならない。滅とは寂滅・涅槃であり最高の樂であると学ぶべきである。

法頌註 (Ye-dharmā-ṭikā) 了。

(以下は余白注記)

[表面]

1. (識 六) : ①眼識, ②耳 (識), ③鼻 (識), ④舌 (識), ⑤身 (識),
⑥意 (識) //1// [下部余白]
- [2]. (名色) 名は四種 : ①受蘊, ②行 (蘊), ③識 (蘊), ④想 (蘊) ;
色は四種 : ①地界, ②水 (界), ③火 (界), ④風 (界) //2//
[下部余白]
3. 眼・耳・鼻・舌・身・意 [右余白]
4. 触 六種 : 眼 触・耳 (触)・鼻 (触)・舌 (触)・身 (触)・意
(触) //4// [下部余白]
- (5 受 6) : 眼触受・楽・苦・不苦不楽 1 耳 (触受) 2 鼻 (触受)
3 舌 (触受) 4 身 (触受) 5 意 (触受) 6 //5//
[下部余白]
- (6 生) 各々の業に従った生, 諸蘊の出現, 諸命根の生起 //6//
[下部余白]
- 7 生死 理解は容易である (この下に saṃyaktṛṣṭi 1 saṃkalpa 2
vāk 3 karmānta 4 ājīva 5 āyāma 6 smṛti 7 samādhyādi 8 とい
う八正道の列挙があるが, どの部分を註釈したものか不明)
[右余白]
- [1'] 無明は45句義, 無見, 無現觀, 癡。 [左余白]
- [2'] 渴愛は六で, 色愛, 声愛, 香愛, 味愛, 触愛, 法愛。 [左余白]
- [3'] 取は四で, 愛取, 欲取, 戒禁取, 我語取。 [左余白]
- [4'] 行は三で, 身行, 口行, 心行。 [左余白]
- [5'] 有は三で, 欲有, 色有, [左余白] 無色有。 このうち欲有は5
種類で, 地獄, 畜生, 餓鬼, 阿修羅, 人と欲界繫 (の諸天)。色有は18
で, 梵衆天…… (以下は色界諸天の列挙であるが省略)。無色界は4
種で, 空無辺処, 識無辺処, 無所有処, 非想非非想処。 [下部余白]

[裏面]

三転とは過去・未来・現在である。過去の生涯から現在、現在の生涯から未来、それらの中間の全てに於いて中有がある。そしてそれは無明を初めとする十二支分に呑み込まれており、無始以来の無明の習気による。まさにそれが、過去などの生涯に於いて無明・渴愛・取を相とする諸煩惱を生じさせる。それから、行・有を相とする業が。それから識・名色・六処・触・受・生・老死を相とする生涯が。これについて云われる――「煩惱から業、それから生涯」と。[上部余白]

本文については何とも言えないが、余白の注記は近代のネワル僧の書き込みのように思われる。十二支のうち、無明、行、愛、取、有の五支を因とし、識、名色、六処、触、受、生、老死の七支を果とするのは、いわゆる「三世兩重の因果」による十二縁起解釈に同じで、余白注記によれば、やはり三世に亘る輪廻が前提とされているらしい。また、如来 (tathāgata) の語義解釈で、三世の諸仏の知る如くに (tathā) 知る (gata) として、gata を認識論的に説明するのは他にあまり例がないように思われる。インド撰述かネパール撰述か不明であるが、単語の綴りや構文に不審な点が散見する。ネパールに本テキストが残っているのは、ネパール写本末尾のコロフォン部分に法頌がしばしば記されていることとも関わりがあろう。また、ネワル佛教徒の間で法頌に関わる儀礼が継承されていることも当然予想されるが、まだ調査が及んでいない。

以上の二点の文献は、共通するタイトル、注解方法や解釈内容から推して、相互に関わりがあると推測されるが、その著述の前後関係は明らかでない。どちらも末尾の部分にはやや密教的な色合いが感じられる。インド佛教の密教化にともない、十二縁起を説く経や十二縁起を略説する（と解された）法頌は陀羅尼・心呪・真言⁽⁴⁸⁾と称されるに至り、密教的な解釈が施され儀軌文献も作成されるようになる。パーラ朝以降、夥しい数の法頌刻文が奉獻され呪的用途に用いられるようになるが、それらは時に十二因縁呪と称されていることが示すとおり専ら十二縁起を説くものとされていたようである。両者は

明らかに並行する現象であろう。二注釈もこうした文脈に於いて理解すべきものと思われる。

註

- (1) 後述するように、法頌の（おそらく唯一のオリジナルな）出典は律藏受戒鍵度中の佛伝記事を締め括る、舍利弗と目連の帰佛を語る著名な一節であるが、そこでは法頌は法門 dhamma-pariyāya と呼ばれている。PTS 辞書はこの法頌のように特定の単一な教義を述べた偈や短篇經典を法門の原義と見るようである (PTSD p. 339, q.v.)。一方 Edgerton は paryāya を a piece of text の意味で用いるのはヴェーダ文獻のみであるとして、PTSD の記述に批判的である (BHSD p. 279, q.v.)。なお、これを縁起法頌と呼ぶことは既に一つの解釈を示すものであるから、本稿では以後は単に「法頌」とする。
- (2) 南海寄歸内法傳卷第四 [大正54, 226c]：造泥制底及拓摸泥像，或印絹紙隨處供養。或積為聚以塼裹之即成佛塔。…。又復凡造形像及以制底。金銀銅鐵泥漆軛石或聚沙雪。當作之時中安二種舍利，一謂大師身骨，二謂縁起法頌。其頌曰「諸法從縁起 如來說是因 彼法因縁盡 是大沙門説」。要安此二，福乃弘多。ここで義淨は「縁起法頌」(*Pratityasamutpāda-gāthā*か?)と明言しているので、彼の時代には既にこの名称が定着していたようである。一方、玄奘は「印度之法，香末為泥作小窰堵波高五六寸，書寫經文以置其中，謂之法舍利也。數漸盈積建大窰堵波，總聚於內，常修供養。…」(大唐西域記卷第九摩伽陀國下 [大正51, 920a])と述べて、經文を法舍利として塔内に納めて供養するインドの慣習を記録するが、その經文については具体的に記していない。
- (3) 塚本啓祥，インド仏教碑銘の研究 I，1996は多数の縁起法頌を収録するが、パーラ朝以降のものが大半を占めており、最初期の作例もグプタ朝を遡らないようである。概ねこれが法頌が祈願・奉獻の目的で刻文として使用され始めた時期の上限を示すものであろう。以下に同書記載の初期作例を摘記する。① Kanheri 10 (p. 420), 5 c.; ② Padana 11 (p. 513) 西インド，カンヘーリ石窟近くの丘陵頂にある摩崖銘文，5/6 c.: 1 ye dharmmā hetuprabhavā hetus teṣāṃ 2 tathāgato hy avadat teṣāṃ ca yo niro [dha] 3 evamvādi mahāśravaṇaḥ [Note] 3: mahāśravaṇaḥ < mahāśramaṇaḥ (Pischel 251: ma > va); ③ Sāñci 915 (p. 892) 石板銘文，6 c.; ④ Sārṇāth 14 (p. 900) 石刻銘文 (「Skt. 4 行，Gupta 文字，Sārṇāth 出土の縁起法頌の最初期の例」とあるも年代が示されていないが，対応する静谷目録II. 139では「5 c., 梵語としては最古例」とする): 1 ye dharmmā hetuprabhā teṣāṃ hetuṃ 2 tathāgato avāca teṣāṃ ca 3 yo tīrodha evamvādi mahāśrama [ṇaḥ]); ⑤ Sār-

nāth 19 (p. 901), 5 c.: ⑥Sārñāth 169 (p. 928) 石板銘文 (年代が示されていないが、対応する静谷目録No. 1699では「3～4世紀のブラーフミー、2語だけ梵語形の混ったPāli」とし、「恐らく碑銘に現れた最古例」[p.185]という): 1 ye dhammā hetuprabhavā 2 tesam hetuṃ tathāga = 3 to avoca tesam ca 4 yo nirodho e = 5 vaṃvādī mahā = 6 śramaṇa; ⑦Sārñāth 231 (p. 935) Dhāmek塔出土石板銘文, Asiatic Society Museum, Calcutta蔵, 6 c.: 1 ye dharmma hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ 2 tathāgato hy avadat teṣāṃ ca 3 yo nirodha evaṃvādī mahaśramaṇaḥ. なお、後注(5)に示す湯山論文 (p. 446)は1世紀頃というパーリ刻文金板の報告例 (Maung Tun Nyein, *Epigraphia Indica* V, 1898-99 [rep. 1960], p. 101)に留保つきで言及するが、筆者未確認である。インド外での最初期の作例としては、塚本上掲書Ⅲ、2003にギルギット出土粘土板銘文法頌7点 (pp. 43-45, Gilgit 1-7)及びペシャワールの凍石円形印章法頌銘文1点 (p. 492, Peshāwar 10)が挙げられるが、いずれも5～7世紀若しくは7～8世紀とされている。他に、スコイエン・コレクション中のパーミヤーン出土 (?) 5-6 c. (?) 銅製銘板ブラーフミー文字刻文法頌があるが、出土地・年代共に疑わしい点がある (後注(5), Lore Sander論文参照)。東南アジア圏の法頌碑刻は7c./8c.を遡らないようである (後注(5)に挙げる一連のSkilling論文参照)。

- (4) 拙稿、真実、佛教學研究50, 1994, pp. 54-55 & 67; 真実の力、平成15年度仏教史学会大会シンポジウム「東アジアの神と仏」基調報告①、佛教史学研究47-2, 2005, pp. 32-47。我国に於る法頌信仰の歴史と実態は審らかでないが、管見に触れた二例を上記基調報告の際の配付資料中に挙げた: (1) 空海請来梵字法身偈 (仁和寺蔵摩尼宝珠曼荼羅の中央にある三弁宝珠に梵字で記される)

(真鍋俊照、空海請来梵字法身偈と摩尼宝珠曼荼羅、佛教藝術122, pp. 71-81); (2) 親鸞直筆「尊号真像銘文」(高田専修寺蔵、重文)の末尾に、別筆で

(i) 華嚴經經文「信為道元功德母」以下七言四句とその釈文, (ii) 「焼法門誦文」, (iii) 十惡の列举、の三文が記されている。このうち第二の焼法門誦文とは、「焼法門誦文 三反 諸 濫 從 緣 生 此 法 從 緣 滅 如 來 說」
モロモロノホウハ ヨリ シヤウス ヨノホウ ヨリ エン メチス ニヨライ トキタマフ
コトイフ コレ タイ シヤ モンノ セチナリ
 是 因 是 大 沙 門 說 (フリガナ・送りガナは原文のまま) というもの

であって、法頌に他ならない。同銘文影印版の解説を担当された平松令三博士は「(三文の) どれも聖人自筆を源泉としていることは疑いない」とされ、生桑完明氏の論文二篇「経釈文問書の研究」、「尊号真像銘文に関連する問題」

(共に同氏著、親鸞聖人撰述の研究、所収)への参照を指示される (親鸞聖人御真筆尊号真像銘文、解説p. 84)。親鸞自筆が間違いないとすれば、彼の法頌への関心を示すものであろう。但し、この親鸞所引(?)の法頌は既知の諸漢訳法頌のどれとも厳密には一致せず、今のところ典拠を明らかに出来ていない。

また、この「焼法門（誦文）」なる奇異な名称の由来も不明である。

- (5) 上記拙稿の注記に示したものと一部重複するが、法頌関連参考文献を以下に
 列举する：榊亮三郎、不空絹索観音像，榊亮三郎論集，1980，pp. 415-425（初
 出は藝文，第一年第六號，明治43年）；湯山明，《十二因縁呪》覚え書き，印度
 學佛教學研究20.1，1971；酒井紫朗（真典），法身偈の真言化について，密教文
 化111，1974；山田明爾，縁起信仰，佛教學研究39・40，1984；三友量順，縁起
 法頌と『造塔功德經』，平川彰博士古稀記念論集・仏教思想の諸問題，1985，
 pp. 125-138；風間敏夫，縁起法頌の一考察，印度學佛教學研究34-1，1985；塚
 本啓祥，法華經の成立と背景，1986，pp. 163-172；Daniel Boucher，The
 Pratityasamutpādagāthā and Its Role in the Medieval Cult of the Relics，
JIAS 14-1，1991；張保勝，沙符と法頌，龍谷大学佛教文化研究所紀要34，
 1995，pp. 151-160；下田正弘，涅槃經の研究，1997，pp. 145-149；Ingo
 Strauch，Zwei Stempel aus Swat (Pakistan)，*BIS* 13/14，2001；Lore San-
 der，An Unusual *ye dharmā* Formula，*Manuscripts in the Schøyen Collec-
 tion III, Buddhist Manuscripts* Vol. II, Oslo 2002，pp. 337-349 & Plate
 XVIII；Peter Skilling，New Pāli Inscriptions from South-East Asia，*JPTS*
 23，1997；do.，A Buddhist Inscription from Go Xoai, Southern Vietnam and
 Notes towards a Classification of *Ye Dharmā* Inscriptions，*80 pi sasada-
 chan dr. prasert na nakhon: ruam bot khwam wichakan dan charuk lae
 ekasan boran*，Bangkok 1999；do.，Traces of Dharma，*Bulletin de l'École
 française Extrême-Orient*，Tome 90-91，2003；do.，Buddhist sealings and the
ye dharmā stanza，*Archaeology of Early Historic South Asia*，New Delhi，
 2008；do.，Buddhist Sealings in Thailand and Southeast Asia: Iconography，
 Function, and Ritual Context，*Interpreting Southeast Asia's Past*，ed. by E.
 A. Bacas et al.，Singapore 2008。なお、最近、種智院大学那須真裕美講師に
 より、インド他諸地域の考古遺物に於ける縁起法頌に関する一連の研究が発表
 されている（那須，縁起法頌とグラニの関連—奉獻塔（votive stūpa）に納入
 される銘文作例から—，密教学研究第43号，2011，及び同論注(1)に挙げられた
 同氏の諸論攷を参照）。また、サンスクリット法頌と漢字銘文（安西開元寺法
 師惠超の名を含む）を刻したユニークなパーラ朝ブロンズ佛像の報告がある：
 Max Deeg，Has Huichao Been Back to India? On a Chinese Inscription on
 the Back of a Pāla Bronze and the Chronology of Indian Esoteric Buddhism，
*From Turfan to Ajanta: Festschrift for Dieter Schlingloff on the Occasion of
 his Eightieth Birthday*，Vol. I，2010，pp. 197-213（本学准教授市川良文氏ご
 教示）。

- (6) 尤も法頌に限らず佛伝関連資料にそうした例は多い（後注(9)参照）。

- (7) 前注(5)の榊論文 pp. 419-423参照。湯山論文 pp. 447-446にも指摘がある。韻律の基本形をマートル数だけで示せば、12 mātrā / 18 mātrā // 12 mātrā / 15 mātrā // である。āryā 韻律については A. K. Warder, *Pāli Metre*, 1967 (passim) 及び Ludwig Alsdorf, *Die Āryā-Strophen des Pāli-Kanons: metrisch hergestellt und textgeschichtlich untersucht*, Wiesbaden 1968 (esp. SS 308-309) 参照。Alsdorf によれば āryā 韻律には古 āryā (alte āryā) と新 āryā (neue āryā) があり、法頌など律藏大品佛伝記事中のもの (19偈を数える) は *Jātaka* (-gāthā), *Thera/Therī-gāthā* などのそれとともに後者に分類される。ともかく、パーリ韻律史の観点から見て、法頌は初期佛典の最古層には属し得ない。
- (8) 法頌諸漢訳については上掲風間論文が網羅的に紹介すると共に、中国佛教 (特に禅宗) に於ける法頌の受容を検討している。東南アジア圏のそれについては一連の Skilling 論文に詳しい。
- (9) 増谷文雄博士によれば、舍利弗・目連二大弟子帰佛譚は諸部派の律文献や種々の佛伝文献にほぼ共通して見られるが、基本的な法資料・律資料に還元できず、佛伝資料固有の第三資料群 (を博士は想定される) にのみ含まれる記述の一つである (増谷文雄, アーガマ資料による佛傳の研究, 1962, p. 347, pp. 371-374.)。法頌は同文で小部經典 *Apadāna* 中の二大弟子帰佛話にも出るが、明らかに律文献にもついた二次的用例であり独立した伝承を示すものではない (PTS ed. Pt. I, p. 25; エピソード全体が śloka で叙述されている中に法頌が原形の āryā のまま挿入されている)。なお、二大弟子帰佛関連資料については、森章司・本澤綱夫・岩井昌悟, 中央学術研究所紀要モノグラフ篇 No. 3【資料集3】仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧, 【43~49】ビンビサーラ王の帰依・舍利弗目連の帰仏・故郷へ帰る, に網羅的に列挙され、ウェブ上でも公開されている (<http://www.sakya-muni.jp/monograph/03/3-1/4349.html>)。

律の鍵度部が佛伝記事を含むことの意味、及び各記事の成立と変遷の過程は、平川彰博士が詳細に論じられたところである (平川, 仏伝より見た受戒鍵度の新占, 著作集10律藏の研究II, 2000, pp. 97-178)。以下に比較のため漢訳諸律の受戒鍵度 (相当箇所) から回収される法頌を訳出年代順に示しておく。① 四分律 (法藏部) (410-412) 卷三三受戒鍵度之三 [大正 vol. 22, 798c]: (阿濕卑言, 汝欲知之, 如來說因緣生法, 亦說因緣滅法)「若法所因生 如來說是因 若法所因滅 大沙門亦說」(此義此是我師說。); ② 五分律 (彌沙塞=化地部) (423-424) 卷十六第三分初受戒法中 [大正 vol. 22, 110b]: (頻鞞言, 我年幼稚學日初淺, 豈能宣師廣大之義, 今當為汝略說其要)「我師所說 法從緣生 亦從緣滅 一切諸法 空無有主」; ③ 根本說一切有部毘奈耶 (703-713)

出家事卷第二 [大正vol. 23, 1027b] : (爾時馬勝便以伽他, 而告之曰)「諸法從縁起 如來說是因 彼法因縁盡 是大沙門説」(上注(2)に示す南海寄帰伝所引の文と全同)。なお、平川博士によれば、現存受戒捷度はパーリ律、五分律、四分律、摩訶僧祇律、十誦律、根本有部律の順に占い。

四分律所引法頌は従来散文と見られてきたが、句読の誤りで、明らかに偈である。五分律所引のそれは散文か偈か判然とせず、また第4・5句が他と大きく相違する。いわゆる五部広律のうち最も訳出の早い(404-409)十誦律は佛伝を欠き、従って法頌も得られない。上座部系諸律と大きく構成を異にする大衆部の摩訶僧祇律(416-418訳出)には受戒捷度がなく、雜誦跋渠法にその相当箇所があるが、そこに本来記されていた筈の佛伝記事は省略されているから、やはり法頌は得られない。ただ、卷三二第十跋渠(*varga)中の五百比丘集法藏、即ち第一結集記事の中に、平川博士が「法身舍利偈」と呼んで法頌と見なされる一連の偈が出る箇所がある(平川上掲書 p. 356)。そこでは阿難は経蔵の誦出を始めるにあたって先ず佛成道の経文を説き(如是我聞一時佛住憍毘羅尼連河側菩提曼陀羅)；五百比丘がこれを承認して南無佛と稱したので、続いて以下の四偈を説く [大正vol. 22, 491c] : 「勤修習正受、見諸法生滅、知法從縁起、離癡滅煩惱。(以下第二～第四偈の初三句は第一偈と同文の繰り返しにつき各偈の第四句のみを記す)...., 證諸法滅盡...., 摧伏諸魔軍...., 如日除眾冥」。次いで長・中・雜・増一の四阿含と雜藏を誦出したという記述が続く。この四偈は確かに法頌に似た趣旨ではあるが、法頌に該当するとは思われない。ここは阿難が経蔵誦出に先立って佛伝を説くという文脈中で成道に続く箇所であり、しかも四偈の内容は初転法輪における四諦の説相に近いから、それに言及するものであろう。実際、有部系の二律でも、同じ文脈で阿難は転法輪経を誦している(十誦律卷六十上・五百比丘結集三藏法品第一 [大正23, p. 448b] ; 根本説一切有部毘奈耶雜事卷三九・五百結集事 [大正24, p. 406b])。大衆部系統でも他部派とほぼ同一の法頌を別に伝えていたらしいことは、次注に示す通りである。従って法頌は上座部系諸部派だけでなく大衆部系でも伝承されていたと見られるから、根本分裂以前に成立していたことになる。

- (10) この前後の文脈の原型は、サーリプッタとアッサジの偈の掛け合いで進行する一種の歌物語風であつたらしく、Alsdorf は上掲書に於いて、従来散文と見なされていた偈の復元を試みている。今は前後を省いて法頌に関わる箇所のみを示す。

atha kho āyasmā Assaji Sāriputtassa paribbājakassa imaṃ dhammapariyāyaṃ abhāsi:

ye dhammā hetuppabhavā tesam hetuṃ tathāgato āha,
tesaṃ ca yo nirodho evaṃvādi mahāsamaṇo

ti. atha kho Sāriputtassa paribbājakassa imaṃ dhammapariyāyaṃ sutvā virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi: “yaṃ kiñci samudaya-dhammaṃ, sabbaṃ taṃ nirodhadhamman” ti. (PTS ed. *Vinaya* I, Mahāvagga p. 40)

ye dhammā hetuppabhavā’ ti hetuppabhavā nāma pañcakkhandhā. ten’assa dukkhasaccaṃ dasseti. tesam hetuṃ tathāgato āhā’ ti tesam hetu nāma samudayasaccaṃ, tañ ca tathāgato āhā’ ti dasseti. tesam ca yo nirodho ti tesam ubhinnaṃ pi saccānaṃ yo appavattinirodho, tañ ca tathāgato āhā’ ti attho. ten’assa nirodhasaccaṃ dasseti. maggasaccaṃ pan’ettha sarūpato adassitam pi nayato dassitaṃ hoti, nirodhe hi vutte tassa sampāpako maggo vutto’ va hoti. atha vā tesāñ ca yo nirodho ti ettha tesam yo nirodho ca nirodhupāyo cā’ ti evaṃ dve pi saccāni dassitāni honti’ ti. idāni tam ev’atthaṃ paṭipādentō āha: evaṃvādī mahāsamaṇo ti. (*Samantapāsādikā* V, PTS ed. p.975)

佛伝のこの件については、周知の通りトルファン出土サンスクリット文四衆経 *Catuṣpariṣat-sūtra* 断簡に並行箇所があり、有部系の伝承を知ることが出来る (Waldschmidt, *Das Catuṣpariṣatsūtra*, Teil I, 1952, SS. 22-23)。同断簡から回収される法頌の断片にもとづいて再構成された原頌は以下の通り (ibid., Teil II, 1962, SS. 378-384): ye dharmā hetuprabhavās teṣaṃ hetuṃ tathāgata āha / teṣaṃ ca yo nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ //。

また、大衆部系説出世部律受戒犍度 (相当箇所) の佛伝部分が増広分離した文献と目されるマハーヴァストゥ *Mahāvastu* にも当然ながら該当部分があり、法頌の貴重な基本資料を提供する。近年、湯山博士によって影印版が刊行された貝葉写本の読み (Senart刊本と若干の相違がある) を以下に示す (Akira Yuyama, *The Mahāvastu-āvadāna in Old Palm-Leaf and Paper Manuscripts*, I., 2001, p. 145, MS Sa, folia 288b2-3; Cf. Senart ed. Vol. III, p. 62.8-9): ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣaṃ tathāgato āha / teṣāñ ca yo nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ //。但し、MVではシャーリブトラが会うのはアッサジ (MVではアシュヴァキン Aśvakīn) ではなくウパセーナ (Upasena; 同名の人物は複数知られるが何れにせよ五比丘には含まれない) であり、これは佛本行集経が「爾時有一長老比丘名優婆斯那, … 入王舍城於其城中次第乞食 (摩訶僧祇師作如是説)」[大正3、875c] として言及するのに一致するから、MVに限らず大衆部系一般の伝承である可能性がある (平岡聡, ブツの大いなる物語・下, 2010, p. 543 注41)。しかもウパセーナは「尊者よ、師は縁已生の諸法について捨離を説く」(MV 61.3-4: pratīyasamutpannāṃ dharmāṃ khalv āyuṣmān śāstā upādāya pratiniḥ-

sargaṃ vijñāpeti) と言うのみで、法頌は説かない。これも佛本行集經 [876 b] に「仁者、我彼大師、説因緣法、談解脫路、我師偈説如是之法（摩訶僧祇師作如是説。迦葉惟師又復別説）」とあるのにはほぼ一致する（但しこの『本行』が引く摩訶僧祇師の伝承には少なくとも「我師偈説如是之法」の文言があり、偈の存在を前提としていることに注意）。そして法頌はその後にシャーリプトラがいきなりマウドガリヤーヤナに対して誦したことになる（MV pp. 61-62；平岡 pp. 213-4）。明らかに不自然な文脈であり、MVの伝承若しくは編集の混乱に関わる問題と推定される。なお、MVネパール諸写本の詳細な検討を行ったVincent Tournier博士から頂戴した近論によれば、MVは本来あくまで大衆部・出世間部律中のGreat Chapter（大事）であり、これをAvadānaと呼んだのは、同書の律との関係が見失われた後の17世紀中頃のネワルの著名な学者Jayamuniが最初らしい（Tournier, *The Mahāvastu and the Vinayapīṭaka of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādin*, *ARIRIAB* XV, 2012, pp. 87-104）。この文献をavadāna（この名称の原義をどう理解するにせよ）と呼ぶことには注意深くあらねばならないようである。

これに関連する資料として、訳出年代は下がるが、佛説初分説經（宋・施護譯）がある。三迦葉の帰佛、ピンピサーラ王の皈依、二大弟子帰佛の三話のみを記述する一種の佛伝であるが、そこではサーリプッタに法頌を誦すのはウパセーナ（烏波西那）である。やはり大衆部の所伝であろうか [大正vol. 14, No. 498, p. 768a]：烏波西那言一我師所説、縁生之法。縁生法者、謂一切法從因縁生、從因縁滅。復以是義、説伽陀曰：「若法因縁生 法亦因縁滅 是生滅因縁 佛大沙門説」。時、舍利子聞是法已、遠塵離垢、得法眼淨。

因みに、玄奘は舍利子帰佛の處に塔ありとしてその因縁を伝えるが、その末尾に「因為頌説、稱讚佛法。舍利子聞已、便獲果證」と云うのみで、法頌そのものは示していない（大唐西域記卷第九摩伽陀國下 [大正51, p. 920c]）：伏醉象東北有窰堵波、是舍利子聞阿濕婆特比丘（唐言馬勝）説法證果之處。初舍利子在家也。高才雅量、見重當時、門生學徒、傳以受業。此時將入王舍大城、馬勝比丘亦方乞食。時舍利子遙見馬勝、謂門生曰「彼來者甚摩訶、不證聖果、豈斯調寂。宜少佇待、觀其進趣」。馬勝比丘已證羅漢、心得自在、容止和雅、振錫來儀。舍利子曰「長老善安樂耶。師何人、證何法、若此之悅豫乎」。馬勝謂曰「爾不知耶、淨飯王太子、捨轉輪王位、悲愍六趣、苦行六年、證三菩提、具一切智、是吾師也。夫法者、非有非空、難用銓緒、唯佛與佛乃能究述、豈伊愚昧所能詳議」。因為頌説、稱讚佛法。舍利子聞已、便獲果證。

- (ii) PTS pp. 11-13. 法眼を得たコーンゲンニャら五比丘は「法を見、法を得、法を知り、法に入り、疑惑を超え、猶予を離れ、無畏を得て、師の教えの他に頼ることなき者」(diṭṭhadhammo pattadhammo veditadhammo pariyo-

gāḷhadhammo tiṇṇavicikiccho vigatakathaṃkatho vesārajappatto aparappaccayo satthusāsane) となり、釈尊に受戒を申し出て聴許される。五比丘が法眼を得て受戒するのはKoṇḍañña, Vappa, Bhaddiya, Mahānāma, Assajiの順であり、アッサジが最も遅い。これが彼がこの場面の登場人物として選ばれた理由なのであろう。なお、四諦説と関わりの深いこの法眼の定型句については平川博士が各種用例を示して論じられ、舍利弗帰佛譚にも言及される(平川、原始仏教における法の意味、著作集1法と縁起、1988, pp. 42-44, pp. 82-83 & pp. 215-216)。但し、そこでは法頌を「四諦説でなく、他の教えによって法眼を生じたという例」に挙げられる(同p. 44 & pp. 82-83注⑩)。法頌をどう解釈されるか不明であるが、少なくとも四諦を説くものとは見られないようである。

- (12) 釈尊が先ず施論戒論生天論の次第説法によってヤサの心を浄化し、次いで「諸佛の卓越せる法の説示」(buddhānaṃ sāmukkaṃsikaṃ dhammadesanā; Cf. Aśoka edict in Bhambra, vinayasamukkasā), 即ち四諦を説くと、ヤサには「恰も清浄で汚れなき布が完全に染め上がるように」(seyyāthāpi nāma suddhaṃ vatthaṃ apagata-kālakāṃ sammadeva rajanaṃ patigaṇḥeyya), 無塵離垢の法眼が生じる(PTS p. 16)。巧みな譬喩を含んだこの一連の同文は、上述の「法を見、法を得、...」という第2の定型句を伴って、そのあとビンピサー王帰依の箇所(PTS p. 36)まで度々用いられる。サーリプッタの場合、この譬喩も第2の定型句も伴わない法眼の定型句のみが記されているのは、佛陀から直接に法を聞いていない故であろうか。
- (13) 森章司博士は以上のブッダゴーサ注にもとづいて、法頌を四諦を説くものと見なされる。そして、法眼の定型句と「法を見、法を得、...」の第2の定型句が他經(MN 56 *Upāli-sutta*, PTS Vol. I, p. 380など)でも佛陀が四諦を説く場面に出ること、その經の注釈文献が第2の定型句中の「法(dhamma)」の語を「聖諦の法(ariyasaccadhamma)」と説明すること、を傍証として示され、法頌は「四諦法頌と言うべきである」と明言される(森、原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究、1995, pp. 533-4)。他方、三枝充恵博士は法頌が縁起を説くものであることを強調され、サーリプッタと縁起思想の密接な関連を示す資料の一つとされる(三枝、縁起の思想、2000, p. 296, pp. 321-322)。
- (14) 大正25, p. 136b-c; Étienne Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*, Tome II, p. 631. この箇所のLamotte 仏訳の注は極めて簡略で、パーリ律大品及びMVの対応部分(上述)を示すのみである。彼は「インド仏教史」で法頌に言及し、その呪力的効力(puissance magique)を簡潔に論じている(Lamotte, *Histoire du Bouddhisme Indien*, p. 547)。

- (15) 初道は預流（須陀洹 *srotāpanna* / *sotāpanna*）をいう。四諦の現観により法眼を得て預流に入ることについては、水野弘元、原始仏教におけるさとり、水野弘元著作選集 2 仏教教理研究、1997, pp. 105-113（初出、日佛年報31, 1966）を見よ。なお、水野博士は同論文で舍利弗帰佛のエピソードに言及される中で法頌を「縁生偈」と呼ばれ、「縁起の道理をのべたもの」とされる。また法眼の定型句も縁起の道理を示したものであり、法眼とは「縁起の道理を知る智慧の眼」であって、「四諦も縁起に他ならないから四諦の道理を正しく理解することによっても法眼が得られるとされるのである。他を教導する場合には、舍利弗のように簡単な縁起の説で法眼を得た例もあるが、多くは四諦によることが多かったから、四諦によって法眼を得て現観したのである」と述べられる（p. 106）。博士は同様の趣旨を他でも再説される（水野、証悟について、同書p. 121, 145）。いかにも四諦と縁起は帰するところであろうが、法頌の解釈を検討する本稿では両者を区別して論を進める。
- (16) 大正25, p.192b; Lamotte, op. cit., pp. 1074-76. 以下の引用文中に出る蜺勒（門）は馴染みのない音写語であるが、Lamotte訳ではPiṭakaと還梵されている。隨相門、對治門もそれぞれ *anuvartana-paryāya* (l'enseignement par implication) 及び *pratipakṣa-paryāya* (l'enseignement par opposition) と還梵・仏訳されているのに従って理解した。蜺勒の語は先に同論巻二に出ており、割注がある [p. 70a20]: 「摩訶迦旃延, 佛在時, 解佛語作蜺勒 (蜺勒秦言篋藏) (【宋】【宮】三篋藏也), 乃至今行於南天竺」。Lamotte仏訳該当箇所には *Pi le* (*Peṭaka*)とあり (Tome I, p. 113, l. 2), 迦旃延の著作として *Peṭakopadesa* を想定する (同p. 109-110, n.b.2)。智度論のこの二箇所の記述によれば、蜺勒 (*Peṭaka* / *Peṭakopadesa*) は三蔵そのものではなく摩訶迦旃延 (*Mahākaccāyana*) が佛在世中に著した膨大な經藏解釈文献を指し、それは今も南インドで用いられている、ということになる。この文献については水野弘元博士、*Peṭakopadesa* について、水野弘元著作選集 3 パーリ論書研究、1997, pp. 119-148, に詳しい。*Mahākaccāyana* 造とされる *Peṭakopadesa* が現存パーリ藏外文献中にあり（但しビルマ第六結集版では經藏小部に含まれる）、これに相当する文献が四諦論（婆薮跋摩造・真諦訳、大正32, No. 1647）には「藏論」の名で、解脫道論（優波底沙造・僧伽婆羅訳、大正32, No. 1648）には「三蔵」の名で、それぞれ引用されるが、それらのどれにもここで智度論が言及する内容に一致する箇所は見られない。藏論 (*Peṭaka*) 或いは藏釋 (*Peṭakopadesa*) は、ミリンダ王問經古層と同時期の前2世紀中頃にインド本土で成立したと見られ、その聖典解釈方法が後代のパーリ三蔵注釈書類に影響を及ぼしていることは明らかなのである。ブッダゴーサの律注釈と智度論（に引かれる蜺勒 *Peṭaka* = 藏論）で法頌解釈が一致しているのも、こう

した共通の淵源に由来するためであろう。とすれば、法頌を四諦の要説とする理解は、同じく前2世紀中頃まで遡ると見ることも許されよう。なお、蜺勒については中国撰述論書に関連文脈がある（本学大学院早島慧氏による）：維摩經義疏（吉藏撰）[大正38, p. 943a]：迦旃延，是南天竺婆羅門姓。...。十弟子内，論議第一，善解修多羅。佛在世時，造蜺勒十萬偈三百二十萬言。...；百論疏（吉藏撰）[大正42, p. 299a]：大迦旃延造蜺勒論。此云假名論。...；明四教義（智顗撰）[大正46, p. 724b]：且智度論明三藏教。有三門入道，一是有門，二是空門，三是假名門也。...。いずれも上記の智度論の記述に基づくようだが、後二者が蜺勒を假名とするのはPrajñapti / Paññattiと解したものか。

- (17) 両偈が例示されるのは勿論人口に膾炙した著名な法門の故であろうが、共に簡潔な偈であるために含意的で多義に解され得るためでもであろう。他に、四念処が説かれれば四正勤その他も説かれたことになる、という例（経は特定されない）も挙げられるが今は略す。
- (18) 現存サンスクリット本は全30章のうち第14章初めまでしかなく、該当箇所原文は得られないため、以下のチベット訳からの和訳を示した：*Sangs rgyas kyi spyod pa (Buddhacarita-mahākāvya)*, De. No. 4156, skyes rabs, nge 63 a7-b1; Pek. No. 5656, skyes rabs, nge 76a3-4; gang zhig chos rnam mtshan ma las ni byung ba ste // de dag rnam kyi mtshan ma bcoms ldan gyis gsungs shing // gang zhig de dag rnam kyis nges par 'gog pa dang // yang dag 'gog pa de yi thabs gang gsungs pa 'o //。原詩の韻律も当然ながら不明であるが、馬鳴の二詩篇（本作品サンスクリット現存部分及び *Saundara-nanda*）に用いられる多様な韻律中にāryāの例は報告されていないから（E.H. Johnston, *The Buddhacarita or Acts of the Buddha*, Pt. II, 1935, Intro. pp. lxiii-lxiv），ここでもその可能性は低い。また、法頌中の因（hetu）に相当する語が本偈ではmtshan maと訳されていることも特異である。これは通常はnimittaの訳語であり、おそらく原文にそうあったものと推定して敢えて「因相」と訳しておいた。hetuを用いないのは韻律の要請など修辭上の理由であろうか。なお、梶山雄一他訳、ブッダチャリタ，原始仏典十，1985，当該偈の訳注に、本偈第4句が律藏大品に出るような通常の法頌と相違することが指摘されている（p. 387注(8)）。
- (19) 佛本行經（失訳、支謙以降羅什までの間か？）[大正4, 81b]；佛所行讚（北涼・曇無讖訳とされてきたが、劉宋・宝雲訳か？5c. 中頃）[大正4, 33 b]；佛本行集經（隋・闍那崛多訳，587-591）[大正3, 876c]。偶々三訳に対応偈が存在するので示したが、言うまでもなくブッダチャリタの漢訳に相当するのは第二の佛所行讚のみである。
- (20) 最初の佛本行經では、アッサジ（馬師）は予め竹林園に於いて佛陀から

「(王舎城へ行く途中で) 異教徒に会ったら四諦の頌で順序よく教えよ」(若卒逢異學、當以四諦頌、次第為解說)と忠告されたことになっている。また、第三の佛本行集經では、二種類の法頌が説かれる。アッサジ(阿濕波踰祇多)は初めに「諸法從因生 諸法從因滅 如是滅與生 沙門說如是」という、道(諦)を含まない(通常の)法頌を誦し、サーリブッタ(優波低沙)が説明を求めるのに応じて、第3句を滅(諦)即道(諦)に改変したこの法頌を重ねて説くのである。佛本行集經は、經末尾に曇無德師所伝「釈迦牟尼佛本行」とあるものに相当するとして法藏部に属すると見られている。しかし、この二偈はどちらも上注(9)に挙げた法藏部所属の四分律所引の法頌とは一致しない。二譯とも漢訳の際に加えられた変更若しくは脚色の可能性もあるが、ブッダチャリタと対照するに、原文も略こうしたものだったと見るべきであろう。

なお、大乘經典ではあるが、大方等大集經(北涼・曇無讖譯)卷第十九寶幢分第九魔苦品第一にもサーリブッタ帰佛話が語られている。そこでは、アッサジ(馬星)がウパティッサ(憂波提舍=サーリブッタ)に法頌に相当する内容を説くが、それは四諦八聖道を要約したものである。そして、ウパティッサは法眼淨を得て須陀洹に入り、「アッサジ比丘が四諦を説くのを聞いて三惡道を超えることが出来た」と語る[大正 Vol. 13, No. 397, p. 129ab]: 馬星答言一「...。善男子、汝今諦聽。我當為汝分別解說。法從緣生、通達是因、因緣滅故、即是寂靜。世間即苦、苦因名集、若修八正、世間集滅。若無苦集、我師說言、名為涅槃。善男子。我師唯說如是等法」。憂波提舍聞是語已。得法眼淨名須陀洹。即說偈言一「我聞比丘說四諦 即得過於三惡道 昔來未聞今得聞 昔所未得今已得。...。」

(21) 勿論、法頌が元來は二大弟子改宗譚とも四諦説とも直接の關係を持たず別個に伝承されていた可能性もあるが、そうした例は文獻的に確認されない。法頌の碑文資料が仮に1世紀まで遡るとしても、上に見たとおり法頌は根本分裂以前の律藏に含まれていたと推定されるから、刻文法頌を律藏中の法頌より古い独立した一次資料と見なすことは難しい。なお、論藏についてはまだ網羅的に調査したわけではないが、今のところ法頌の例を検出していない。

(22) Louis de La Vallée Poussin, *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the Indian Office Library*, Oxford 1962, §127.2, pp. 49-50, No. 127 & No. 128; 山口瑞鳳他編, スタイン蒐集チベット文獻解題目録第2分冊, 東洋文庫 1978, pp. 51-52, No. 127 & 128. 筆者がこの文獻の存在を知ったのは、かなり以前にPeter Skilling博士から個人的に提供頂いた情報による。記して深謝申し上げる。また、本学図書館にはスタイン・コレクションのマイクロフィルムからのプリントを製本したものが収蔵されているものの、甚だしく縮小されたサイズと経年変化のせいで殆ど判読不能であるため、読解に

は東洋文庫所蔵のマイクロからのプリントを用いた。同資料の入手にあたっては、東京大学教授藤明博士の誠にご懇切なご高配に預かった。併せて深甚の謝意を表する次第である。両博士に折角のご配慮を頂きながら既に相当の年月を経過してしまったのは偏に筆者の怠慢による。

- (23) 著者名 Vinayavarmanは、コロフォンに見える著者名 'Dul ba'i go chaをブーサン目録が還梵するものに従う。チベット名梵名共にチベット大蔵経目録類には検出されず、この著者は従来全く知られていないように思われる。以下にテキストを示すが、敦煌文献特有の古い綴字法は全て修正を加えず原写本のままである。

rGya gar skad du / Phrad ti dya sa mud pa(') da ga(') tha' //
[*Pratityasamutpāda-gāthā]

Bod skad du / rTen cing 'brel(d) par 'byung ba'i tshig su bc(h)ad pa' //
chos rnams gang dag rgyus byung de dag gi //
rgyu dang de dag 'gog pa gang yin pa'ang //
de bzhin gshegs pa nyid kyis bka' stsal(d) te //
de skad gsungs pa'ang dge sbyong [B38a2] chen po yin // //

rGya gar skad du / P(h) ra ti dya' / sa mud pa' da / dga' tha' / [A34a2] byag khyi na' // [*Pratityasamutpāda-gāthā-vyākhyāna]

Bod skad du / rTen cing 'brel par 'byung ba' i tshig su bc(h)ad pa' //
rnam par bshad pa' //

thams ca mkhyen pa la phyag 'tshal lo //

slobs dpon dByig gnyen [B38a3] la stsogs pa / sngon gyi slobs dpon
rnams kyis / byang chub(') thob pa dang rjes su 'thun ba(') / rten cing 'brel
par 'byung ba'i don bshad pa' / mdzad pa nyid pas / sngun (/ sngon, B)
ma byung ba'i don bstan par bya ba [A34a3] ni cung zad kyang myed do //
de lta yin mod kyī skye bo dbang po (rtul po, B) rnams la [B38a4] phan
gdags pa'i phyird dang / rang gi dren ba bskyed par bya ba'i phyird / rten
cing 'brel par 'byung ba' i bshad pa brtsam mo //

chos rnams gang dag rgyus byung zhes bya ba la stsogs pa la / gang
dang de gnyis ni rtag tu 'brel pa'i phyir / de dag gi ces bya ba'i sgra sbyar
par de dag ces [B38a5] bya ba'i sgra yang sbyar bar bya ste / [A34a4]
bka' stsal(d) te zhes bya ba byed pa'i tshig bstan pa ni / de dag ces bya ba'i
sgra la bltos par bya 'o // des na tshig gi don ni / chos rnams gang dag
rgyus byung ba de dag de bzhin gshegs pas bka' stsal(d) te / zhes bya ba
'dir 'gyur ro //

rgyus byung zhes bya ba ni / rgyu las skyes pa ste / [B38b1] nye bar len

pa 'i phung po lnga po 'bras bur gyur pa rnams shes bya ba'i tha tshig go // [A34b1] 'dis ni sdug bsngal gyi bden ba dang / (de, A) myi rtag pa dang / sdug bsngal ba dang stong pa dang / bdag myed pa'i rnam pa dag gis bsgo (-m, B) bar bya ba yang bstan te / gang gi phyir sdug bsngal ni yongs su shes par bya zhes gsungs pa 'i [B38b2] phyir ro // gal te ji (/ ci, B) ltar na 'dis myi rtag pa ('i) la stsogs pa'i rnam pa yang bstan pa yin zhes na(') / bshad pa' // gang (la, B) rgyu las skyes pa de ni myi [A34b2] rtag pa 'o // gang myi rtag pa de ni sdug bsngal ba 'o // gan sdug bsngal ba de ni stong pa 'o // gang stong pa de ni bdag myed pa yin (no) zhes gsungs pa'i phyir ro //

de dag gi rgyu zhes bya ba [38b3] la / **de dag gi** zhes bya ba ni / sdug bsngal gyi ngo bo (nyid) rnams kyi 'o / **rgyu** ni byed rgyu ste kun 'byung ba zhes bya ba 'i tha tshig go // de dag gi rgyu yang / yang 'byung ba [A34b3] (pa, B) 'i sred pa dga' ba 'i 'dod chags dang bchas (/ bcas, B) pa 'o // 'dir yang tshig gong ma las gang dag ces 'byung ba'i sgra la bltos par bya ste // [B38b4] gang dang de gnyis kyang 'brel pa 'i phyir / de zhes bya ba 'i sgra yang sbyar bar bya 'o // des na (don, B) ni rgyu gang dag yin ba de dag kyang / de bzhin gshegs pas bka' stsald to zhes bya ba 'di(s) bstan par 'gyur ro // [A34b4] 'dis ni kun 'byung gi bden ba dang / de kun 'byung ba dang / rgyu dang rab tu skye ba dang / rkyen gyi [B38b5] rnam pa dag gis bsgo(-m, B) bar bya ba yang bstan te / gang gi phyir kun 'byung ba ni spang bar bya zhes gsungs pa 'i phyir ro // gal te ji (/ ci, B) ltar na 'dis kun 'byung ba la stsogs pa'i rnam pa yang bstan pa yin zhe na / de myed na myi 'byung ba'i phyir / rgyu'i [A35a1] rnam pa gsungs pa nyid kyis / kun 'byung ba la stsogs pa rnam pa [B39a1] gzhan rnams kyang bstan par gyur (-d, B) ba kho na 'o //

de dag 'gog pa gang yin pa'ang zhes bya ba 'dir yang / de zhes bya ba 'i sgra la bltos par bya ste / des na don ni / 'gog pa gang yin ba de yang bka' tsal(-d) to (/ te, B) zhes bya ba 'di yin bar rig par bya 'o // 'dis ni 'gog pa'i bden ba dang / [A35a2] de 'gog pa dang / zhi ba dang / gya nom ba dang [B39a2] nges par byung ba 'i rnams pa dag gis bsgom bar bya ba 'ang (/ yang, B) bstan(-d) te / gang (gi, B) phyir 'gog pa ni mngon sum (/ du, B) bya zhes gsungs pa 'i phyir ro // gal te zhi ba la stsogs pa 'i rnam pa ni ma gsungs na / de ci ltar shes she na / 'dir bshad pa(') // de myed na mi 'byung ba 'i phir(-d) 'gog pa 'i rnam pa gsungs pa nyid kyis zhi ba 'i rnam pa [B39a3] la stsogs pa [A35a3] gzhan dag kyang bstan par gyur pa kho

na 'o //

de skad gsungs pa 'ang zhes bya ba la / **de skad** ces bya ba 'i sgra ni / de bzhin zhes bya ba 'i don yin no // de bzhin zhes bya ba 'i sgra yang ci ltar zhes bya ba 'i sgra dang 'brel (/ 'bral, B) te / des na don ni ji (/ ci, B) ltar sdug bsngal gyi bden ba 'i rgyu bka' stsal(d) [B39a4] pa de bzhin du / 'gog pa'i thob par byed pa 'i rgyu yang gsungs so zhes bya ba 'di yin [A35a4] bar rig par bya 'o // 'dis ni 'gog pa thob par byed pa 'i rgyu lam gyi bden ba yang gsung(s) ba nyid dang / de (la) lam dang / rigs pa dang / (b-, B) sgrub pa dang nges par 'byin(-d, B) pa 'i rnam pa dag gis bsgom bar [B39a5] bya ba yang bstand te / gang gi phyir(-d) lam ni bsgom bar bya zhes gsungs pa 'i phyir ro // gal te ji (/ ci, A) ltar na / lam dang / rigs pa dang / (b) sgrub pa dang [A35b1] nges par 'byin pa'i rnam pa rnams kyang shes par bya zhe na(') // de dag ni (/ gi, B) lam gyi bden ba myed na mi 'byung ba 'i phyir(-d) // de rtogs pa nyid kyis de dag kyang rtogs par 'gyur [B39b1] ba kho na'o // yang na 'gog pa la yang don gnyi (s, B) su rig par bya ba nyid (de, B) / lam 'di (s, B) las dang nyon mongs pa rnams 'gog par byed pas / 'gog pa dang / lam gyi [A35b2] bden ba 'o zhes bya ba 'i don yin no //

bcom ldan 'da's ni dge sbyong gi chos (dan, B) ldan bas / **dge sbyong** ste / dge sbyong thams cad kyi gtso bor gyur (d) pa'i [B39b2] phyir(d) / **chen po yin no** /

'di dag gis ni sdug bsngal rgyu dan bchas (/ bcas, B) pa dang / 'gog pa (') thob par byed pa 'i rgyu dan bchas (/ bcas, B) pa gsung pa (/ ba, B) 'i phyir(d) / bcom ldan 'das ('da's, B) ni(') [A35b3] bden ba bzhi gsung pa (/ ba, B) yin no zhes bstan pa yin no // 'dir ni ci (/ ji, B) ltar mngon bar rtogs pa 'i go rims kyis yin gyi / skye ba'i go rims kyis ni ma yin no // [B39b3] 'dis ni rnal 'byor (d, B) pa byang cub (/ chub, B) gyi (/ kyi, B) spyod pa la brtson bas / rtag pa la stsogs pa rnam pa bcu drug gi gnyen por myi rtag pa la stsogs pa'i [A35b4] rnam pa bcud drug gis / 'phags pa 'i bden ba bzhi bsgom bar bya 'o zhes bstan pa yin no //

tshigs su bcad pa 'di'i don gzhan du yang [39b4] rtogs par bya ste / **chos rnams gang dag rgyus byung de dag gi rgyu** zhes bya ba 'dis ni / kun nas nyon mongs pa(', B) pa 'i rten cing 'brel par 'byung ba'i yan lag bcu gnyis bstan pa(-r, B) mdzad do // [A 36a1] **rgyu dang de dag 'gog pa gang yin ba dang** (sic!) zhes bya ba 'dis ni / rnam par byang ba 'i rten [B39b5] cing

'brel par 'byung ba('i) bstan pa(-r, B) mdzad do // **de bzhin gshegs pa nyid kyis bka' stsal te** zhes bya ba 'dis ni / de las gzhan bas bshad pa bkag pas / de bzhin gshegs pa kho nas bka' stsal(d) par bstan to // **de skad** [A36a2] **gsungs pa'ang dge sbyong chen po yin** zhes bya ba 'dis kyang / bcom ldan 'das (/ 'da's, B) ni phyin ci [B40a1] ma log pa gsungs pa (/ ba, B) nyid dang / bsod nams dang / ye shes kyi tshogs yongs su rdzogs pa'i phyir dam pa nyid du bstan to // 'dis ni bsdus pa 'i don yin no //

tshig gi don bshad par bya ste / gang dang de gnyis ni rtag du 'brel'd (/ 'bral, B) [A36a3] pa'i phyir / des na don ni / chos rnams gang dag rgyu las(') byung ba de dag de bzhin [B40a2] gshegs pas bka' stsal(d) to zhes bya ba 'di yin no // chos de dag ni gang yin / rgyu dag kyang gang yin zhe na(') / de la re shig chos('di) dag ni bdun te / bdun (dag) gang dag yin zhe na / rnam par shes pa dang / mying dang gzugs dang / skye mched drug dang / [A36a4] reg pa dang / tshor ba dang / skye ba dang / rga shi ste / chos bdun po 'di dag ni / 'bras [B40a3] bur gyur(-d, B) pa skye ba'i kun nas nyon mongs pa yin no // de dag gi mtshan nyid ni gzhan dag las bshad pa nyid de / gzhung mangs su (' , B) dogs pas ma bshad do // rgyu dag kyang gang zhe na / ma rig pa dang / sred pa dang / len pa dang / 'du byed dang / srid pa zhes bya ba lnga po (de, B) dag ni rgyu dag [B40a4] yin no // de la ma rig pa dang / sred pa dang / [A36b1] len pa ni / nyon mongs pa 'i kun nas nyon mongs pa 'o // 'du byed dang srid pa ni / las kyi kun nas nyon mongs pa 'o / rgyu 'di dag las 'byung bas na(') / **rgyus byung de dag gi rgyu** zhes bya ba la **rgyus** ni byed rgyu 'o / **de dag** ces bya ba ni / chos bdun po rnams [B40a5] dang / rgyu lnga po rnams so //

gzhan na re / chos bdun po dang / rgyu lnga po de dag gi [A36b2] rgyu (gang) yin zhes 'dris te (/ 'dri ste, B) / rgol ba 'di 'i bsam ba ni / yan lag bcu gnyis (la) ma gtogs pa 'i rgyu ma brjod pa 'i phyir dang / brjod na yang thug pa myed par thal bar 'gyur te / de'i phyir chos bdun dang / rgyu lnga po ('di) dag gi rgyu ni myed pa yin no // [B40b1] snyam du bsams so // 'di ni 'di ltar(d) bcom ldan 'das ('da's, B) kyis rten cing 'brel par [A36b3] 'byung ba 'i 'khor lo nyon mongs pa las / nyon mongs pa skye ste / sred pa las len pa 'o // nyon mongs pa las las te / len pa las srid pa dang / ma rig pa las 'du byed do // las las kyang dngos po ste / 'du byed las rnam par shes pa dang / [B40b2] srid pa las skye ba 'o // dngos pa las kyang dngos po ste / rnam par shes pa las [A36b4] (kyang, B) mying dang gzugs nas / reg pa las tshor ba 'i bar dang / skye ba las rga shi 'o // dngos po las kyang

nyon mongs pa ste / tshor ba las (kyang, B) sred pa skye 'o // zhes rnam par gzhas (/ bzhag, B) pa nyid kis bstan pa yin no // gang gi phyir srid pa 'i yan [B40b3] lag rnam tshul de ltar rnam par bzhag (/ gzhas, B) pa de 'i phyir / ma rig pa la stsogs pa (') nyon mongs pa dang / [A37a1] las dang dngos po 'i rang gi ngo bo dang / dngos po dang las dang nyon mongs pa las kyang zhes bstan (-d, B) pa yin no // de 'i phyir yan lag (gzhan) ma brjod pas thug pa myed par yang thal bar myi 'gyur [B40b4] la / 'dir chos bdun dang / rgyu lnga po dag skyed par byed pa 'i rgyu myed pa (-r, B) yang ma yin bar gnas so //

yang slob dpon [A37a2] gang dag rgyu zhes bya ba 'i sgra tshig (gi, B) phrad yin bar bchad ('chad, B) pa de dag gis ni rten cing 'brel par 'byung ba 'i 'khor lo ma bstan (-d, B) pa 'i phyir (d) dang / de ma bstan pas kyang gzhan dag rgol [B40b5] ba 'i glan ka 'i lan ma btab pa 'i phyir / ci yang ma brjod du zad do //

de dag 'gog pa gang yin pa'ang zhes bya ba 'dir yang de zhes bya ba 'i sgra (la) [A37a3] bltos par bya ste / des na don ni 'gog pa (gang yin ba') de yang bka' stsald to zhes bya ba 'di yin no // 'gog pa dang nye bar zhi ba dang / mya ngan (las) 'das ('da's, B) pa dang / thar pa zhes bya ba dag [以下 B欠] ni rnam grangs so // 'dis ni rnam par byang ba'i rtend cing 'brel par 'byung ba'i mtshan nyid bstan to / rnam par byang ba'i mtshan nyid [A37a4] bstan pa yang ji lta bu zhe na / bshad pa bcom sdan 'das kyis ma rig pa 'gags pas 'du byed 'gags pa nas / skye ba 'gags pas rga shi 'ga [g] s te / sdug bsngal gyi phung po chen po 'ba' shig po 'di dag 'gags par gyur ro zhes ram par byang ba'i phyogs rgyas par bka' stsald pa'o //

de bzhin gshegs pa nyid kyis bka' stsal te zhes bya ba la **de bzhin gshegs pa** [A37b1] zhes bya ba ni yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas gzhan dag gis skad gsungs pa de bzhin du / gsungs pas na' de bzhin gshegs pa zhes bya'o // **bka' stsald** te zhes bya ba ni gsungs par 'gyur ro zhes bya ba'i tha tshig go //

de skad gsungs pa'ang dge sbyong chen po yin zhes bya ba 'di ltar 'di la bstan pa rtag pa'i tshul du gsungs pa'i ngang tshul yod pas / **de skad gsungs pa'ang dge sbyong chen po yin** [A37b2] zhes bya ba la tso bo dang / dam pa dang phul dang rab mchog ces bya ba'i tha tshig go / **dge sbyong** zhes bya ba ni sdig pa zhi bar gyur pa'i phyird / dge sbyong ngam / nyon mongs pa dang / nya ba'i nyon mongs pa zhi bar gyur pa'i phyir dge sbyong zhes bya ste / de bzhin gshegs pa dgra bcom ba yang dag par rdzogs pa 'i sangs

rgyas gang yin ba'o zhes bya ba'i tha tshig go /

'dir rnam par bshad pa gnyis kas yang kha chig rgol ba / rnam par [A37 b3] bshad pas ni lung dang rigs pa gnyis brjod par bya ba yin na' / ji ltar na rigs pa de myi brjod ce na / rigs pa smra ba rnams kyis gzhan du 'phags pa 'i bden ba bzhi la stsogs pa'i bsgrubs par byed pa'i rigs pa bshad zin pas / 'dir ni gzchung mang du dogs pa'i phyir ma smras so / de nyid kyi phyir bchom sdan 'das kyis kyang rten cing 'brel par 'byung ba mdor bstan pas bka' stsald par rig par bya'o / 'di bstan pas cir [A37b4] 'gyur zhe na / 'di ltar rnal 'byor pa'i dbang phyug rnams rten cing 'brel par 'byung ba mnyan pa dang bsam ba dang / bsgom ba'i rim gyis nyon mongs pa dang / nye ba'i nyon mongs pa bag chags dan bchas pa'i gnas nas spang ste / ring po myi thogs par byang chub thob par 'gyur ro / de bas na 'phags pa'i bden ba bzhi bsgom ba dang / rten cing 'brel par 'byung ba bsgom ba'i phyir brtson bar bya 'o // // *rTen cing 'brel par 'byung ba' i tshig su bcad pa rnam par bshad pa /*

sLobs dpon Kun gyis bkur ba'i sde pa (*Sammatiya) Dul ba'i go chas (*Vinayavarman) mdzad pa rdzogs so //

- (24) Skilling [1999], p. 183, 2.3.1. 上注(3)に示した法頌碑文の諸例をも参照。
- (25) 近年、正量部に関する研究は、岡野潔、本多至成、並川孝儀などの諸氏により著しい進展を見せている。ここでは最新の業績として並川、インド仏教教団正量部の研究、2011を挙げるにとどめる。
- (26) 世親に法頌に対する注釈があったことは知られていないから、縁起經釋を指すものか。或いは、以下の記述を見れば本文獻が俱舍論の直接的な影響下に著された注釈であることは明らかであるから、同書に示される縁起解釈を云うのであろうか。世親の縁起説については楠本信道博士の近著が委細を尽くしている(楠本、『俱舍論』における世親の縁起観、2007)。
- (27) 俱舍論賢聖品に、果なる(五)取蘊を苦諦、因なる(五取蘊)を集諦、とするのによるであろう。*Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) ad *Abhidharmakośa-kārikā* (AK) VI.2, Pradhan 2nd ed., p. 328.14: tatra phalabhūtā upādāna-skandhā duḥkhasatyam / hetubhūtāḥ samudayasatyam /... 櫻部建・小谷信千代、俱舍論の原典解明賢聖品、1999, p. 12
- (28) 以下には有部正説のいわゆる四諦十六行相の現觀の次第が要説されている。四諦説の諸相は、平川、四諦説の種々相と法觀、著作集1, pp. 213-270に詳しい。また、俱舍論(第七章・智品)の記述を中心にこの學説を的確に紹介・分析された本學青原令知教授の專論を参照されたい(青原、『俱舍論』における四諦十六行相の定義、櫻部建博士喜壽記念論集・初期仏教からアビダルマへ、

2002, pp. 241-258).

- (29) 苦・集・滅・道をそれぞれ遍知・永断・直証・修習することを、示転・勧転・証転の三段で説く、いわゆる四諦三転十二行相は、諸部派に通ずる經説であり、俱舍論では賢聖品54偈下に出る (AKBh 371.11-24; 櫻部・小谷, 前掲書 pp. 336-338; 平川, 上掲論文をも参照)。
- (30) 法頌第2句の hetum (単数対格) を複数対格として解釈することを指示するようである。或いは、複数対格 hetūn の読みを持つ法頌テキストを前提としている可能性もある。
- (31) 四諦の順序が現觀の順であることを云う俱舍論賢聖品の記述に依るのであろう [AKBh Pradhan 2nd ed. 327.15-328.5]: “duḥkhaṃ samudayas tathā / nirodhamārga iti” (VI.2bc) eṣa eṣāṃ anukramaḥ /.../ sa punar ayam “eṣāṃ yathābhisamayaṃ kramaḥ” (VI.2d) //2// yasya hi satyasyābhisamayaḥ pūrvas tasya pūrvanirdeśaḥ / itarathā hi pūrvam hetunirdeśo ’bhaviṣyat paścāt phalanirdeśaḥ / keśāṃcit utpattyanukūlā deśanā / yathā smṛtyupasthānadhyanādinām /.../ satyānām tv abhisamayānukūlā deśanā /... (櫻部・小谷 pp. 6-7)
- (32) 十六行相が常樂我淨の四顛倒を初めとする十六の顛倒の対治であるという見方は、俱舍論に説かれ衆賢も継承する有部の正説である (青原, 上掲論文参照)。
- (33) 以上の十二縁起に関する説明は、俱舍論第三章世間品における十二縁起の記述に依ったものであろう。山口益・舟橋一哉, 俱舍論の原典解明世間品, 1955, 第二章第五節「十二因縁の略撰」にほぼ相当する。本文献との密接な関連を示すために、やや長文になるが以下に該当箇所を掲げる (刊本を適宜修正したが一々記さない) [AKBh, 134.4-135.6]: sa punar eṣa dvādaśāṅgaḥ pratītya-samutpādas trisvabhāvo veditavyaḥ / kleśakarmavastūni / tatra “kleśās trīṇi” (III-26a1) trīṇy aṅgāni kleśasvabhāvāny avidyātrṣṇopādānāni / “dvayaṃ karma” (III-26a2) aṅgadvayaṃ karmasvabhāvaṃ saṃskārā bhavaś ca / “sapta vastu” (III-26b1) saptāṅgāni vastusvabhāvāni vijñānanāmarūpaśāḍāyatanaśvedanājātijarāmaraṇāni kleśakarmāśraya-tvāt / yathā ca vastu saptāṅgāni “phalaṃ tathā” / (III-26b2) saptai-vāṅgāni phalabhūtāni / śeṣāṇi pañca hetubhūtāni karmakleśasvabhāvatvāt /.../ yadi khalu dvādaśāṅga eva pratītyasamutpāda evaṃ saty avidyāyā anupadiṣṭa hetukatvād ādimān saṃsāraḥ prāpnoti jarāmaraṇasya cānupadiṣṭaphalatvād antavān / aṅgāntaraṃ vā punar upasaṃkhyā-tavyaṃ tasyāpy anyasmād ity anavasthāprasaṅgaḥ / nopasaṃkhyā-tavyam / yasmād upadarśito ’tra Bhagavatā—”kleśāt kleśaḥ kriyā caiva

tato vastu tataḥ punaḥ / vastukleśās ca jāyante bhavāṅgānām ayaṃ
nayaḥ" // (III-37) // kleśāt kleśo jāyate tṛṣṇāyā upādānam / kleśāt
karma / upādānād bhavo 'vidyāyās ca saṃskārā / karmaṇo vastu saṃskāre-
bhyo vijñānaṃ bhavāc ca jātiḥ / vastuno vastu vijñānān nāmarūpaṃ yāvat
sparśād vedanā jāteś ca jarāmarañam / vastunaḥ kleśo vedanāyās tṛṣṇ
eti / yasmād eṣa nayo vyavasthito bhavāṅgānāṃ tasmād avidyā 'pi
kleśasvabhāvā vastunaḥ kleśād veti jñāpitaṃ bhavati / vedanāntāc ca
jarāmarañavastunaḥ punaḥ kleśo bhāvīti nātra punaḥ kiṃcid upasaṃ-
khyeyam / "evam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasya samudayo
bhavati" iti vacanāt /...

(34) 頌中の hetu を不変化辞と見なすというのが、具体的にはどのような解釈であるのか判然としない。第1句中の hetu は複合語の後分をなしているから、不変化辞の hetu とは第2句にあるそれを指すと見る他ない。hetuṃ teṣāṃ (/ teṣāṃ hetuṃ) を「それらのために」とでも解するのであろうか。或いは he tu と2つの不変化辞に分けて読むのであろうか。ともかく、こうした記述から、また序文での先師たちへの言及からも、このテキストが先行する複数の法頌註釈文献を前提としていることは明らかである。

(35) 沙門 (śramaṇa / samana) を語根√sam / √sam 「静める」から導く通俗語源解釈である。阿含・ニカーヤに説かれるものであるが、ここではやはり俱舍論賢聖品の記述にもとづくのであろう (AKBh ad AK VI.51a, p. 369.11-13: anāsravo mārgaḥ śramaṇyam / tena hi śramaṇo bhavati / kleśasaṃśāmanāt / "śamitā anena bhavanti anekavidhāḥ pāpakā akuśalā dharmā vistareṇa yāvaj jarāmarañiyās tasmāc chramaṇa ity ucyata" (MA 182) iti sūtre vacanāt / ; 櫻部・小谷, pp. 322-323)。なお、雲井昭善博士、新版パーリ語佛教辞典 samaṇa の項 p. 891, IV. samaṇa (沙門) の通俗語源解釈、をも参照せよ。

(36) 「四諦を証明する正理を説く論理学者」といえば、直ちに想起されるのはダルマキールティ (Dharmakīrti) である。そうだとすれば、本注釈の著者はダルマキールティ以後の人物ということになる。

(37) 中村元博士は法頌に言及される中で、「縁起法頌と呼ばれているが、けっきょく四つの真理 (四諦) の説と同じものに帰することは明らかであろう」とされ、集諦・滅諦をそれぞれ十二支縁起の順観 (流転分) と逆観 (還滅分) と等視する初期經典の例 (AN III, 61, 11 & 12; PTS vol. I, p. 177; 南伝17, pp. 286-287) を挙げられる (中村元選集 [決定版] 第16巻, 原始仏教の思想 II, 1994, pp. 414-5)。以下に同経当該箇所を抜粋を示す: 「比丘らよ苦集聖諦とは何か。無明を縁として行が..., 生を縁として老死, 愁悲苦憂惱が生じる, かく

してこの純苦蘊が生じる、比丘らよこれが苦集聖諦と言われる。比丘らよ苦滅聖諦とは何か。無明の無余離貪滅により行が滅する、...、生の滅により老死、愁悲苦憂悩が滅する...。かくしてこの純苦蘊が滅する、比丘らよこれが苦集聖諦と言われる。」(katamañ ca bhikkhave dukkhasamudayo ariyasaccaṃ: avijjāpaccayā saṅkhārā, ..., jātippaccayā jarāmaraṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā sambhavanti. evam etassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti. idaṃ vuccati bhikkhave dukkhasamudayo ariyasaccaṃ. katamañ ca bhikkhave dukkhanirodho ariyasaccaṃ: avijjāya tv eva asesavirāgaṇirodhā saṅkhāraṇirodho, ..., jātinirodhā jarāmaraṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā nirujjhanti. evam etassa kevalassa dukkhakkhandhassa nirodho hoti. idaṃ vuccati bhikkhave dukkhanirodho ariyasaccaṃ). 法頌を四諦と十二緣起に通じるものとする解釈の淵源は、或いはこのあたりまで遡るのかもしれない。

- ③⑧ テルゲ版 'Dul ba, Su 253b-254a (北京版西藏大藏經にはこのテキストが収められていない)。著者名 Śāsvatavajra はチベット訳の rTag pa'i rdo rje を東北目録が還梵するものに従う。藏訳大藏經目録によれば著者には sādhanā 類の著作が10点余ある。以下にテキストを示す。

rGya gar skad du / *Ye dharmā tika* / Bod skad du / *Ye dharmā'i 'grel ba* /
Sangs rgyas la phyag 'tshal lo /
da ni ye dharmā he tu pra bā (sic!) va he tuṃ / zhes bya ba la sogs pas
rgyud rab tu gnas pa'i don du grub pa'i mtha' gsungs pa yin te / 'chad pa po
rnams la yang gsungs pa yin no //

mdo sde dang ni rnal 'byor gyi // khang par yang ni 'jug pa nang //
ye dharmā sogs tshigs bcad kyis // sangs rgyas grub mtha'i phyag
rgyas btab //

ces so //

de yang ye dharmā sogs ni bod kyi skad du /
chos rnams gang dag rgyus 'byung de dag ni // rgyu dang de la 'gog pa
gang yin pa'ang //

de bzhin gshegs pa nyid kyis bka' stsal te // de skad gsungs pa'i tshul can
dge sbyong che //

zhes bya ba'o //

chos rnams gang dag rgyus byung (sic) zhes pa la gang dag ni rab tu
grags pa bdun po rnams te // ma rig pa la sogs pa'i lcags sgrog gis kun du
(sic) bskor ba'i 'khor lo ni rgyu dang 'bras bu'i bdag nyid can no // de dag
ni zhes pa nyon mongs pa dang / las dang sdug bsngal gyi yan lag gsum

dang / gnyis dang bdun gyis phyé bas gsum du yang gyur pa yin te / ma rig pa'i thog ma yin par sangs rgyas nyid kyis gsungs pa yin no // ma rig pa dang / 'du byed dang / rnam par shes pa dang / ming dang gzugs dang / skye mched drug dang / reg pa dang / tshor ba dang / sred pa dang / len pa dang / srid pa dang / skye ba dang / rga shi ste bcu gnyis po rnams so // ma rig pa ni 'dod chags dang / zhe sdang dang / gti mug gi bdag nyid can no // 'du byed ni sngon gyi las so // rnam par shes pa ni mngal du 'jug pa'o // ming dang gzugs ni nur nur po la sogs pa lnga'o // skye mched drug ni mig la sogs pa la 'dod do // reg pa ni yul dang / dbang po dang / rnam par shes pa rnams phrad pa'o // tshor ba ni bde ba la sogs pa'i bdag [254a→] nyid can no // sred pa ni 'khrig pa'i 'dod chags so // len pa ni 'dod pa'i yul len pa'o // srid pa ni 'byung bar 'gyur ba'i srid pa'i 'bras bu can gyi las so // skye ba ni slar yang phung po nyid mtshams sbyor ba'o // rga shi ni gsal lo // dang po dang / brgyad pa dang / dgu pa rnams ni nyon mongs pa'o // las ni gnyis pa dang / bcu pa'o // lhag ma bdun ni sdug bsngal lo // de gsum gyis bsdu pa'i phyir bcu gnyis ni **chos rnams** so // gsum las gsum dang gnyis las gnyis 'byung la // bdun las bdun yin pa'i phyir / de kho na 'khor ba' 'khor lo rgyu dang 'bras bu yang ste / 'gro ba thams cad de / 'dir sems can gzhan ni 'ga' yang yod pa ma yin te / stong pa 'od zer ltar chos rnams las stong pa'i chos rnams 'byung bar 'gyur te / kha ton dang / mar me lta bu dag ni rgyu las byung ba'i don du'o //

rgyu dang de rnams kyi yang de **bzhin gshegs pa nyid kyis bka' stsal te** zhes pa ni / de ji ltar thugs su chud pa de bzhin du gsungs pa'i phyir te / gzhan ma yin par gsung ba nyid kyi phyir 'khor ba'i rgyu dang rkyen gsungs pa yin no //

de la 'gog pa gang yin pa'ang // zhes bya ba la / 'ang gi sgra las de kho na rgyu dang bsams par gsungs pa yin gyi / sangs rgyas rnams kyi mya ngan las 'das pa yan lag bcu gnyis 'gogs pa'i mtshan nyid kyang gsungs pa yin te / zung 'jug pa'i bde ba brtags pa nam mkha'i me tog ma yin zhing sems med pa bems po ma yin pa'i rang bzhin no //

de skad gsungs pa'i tshul can dge shyang che // zhes bya ba ni zung du 'jug pa gsung ba'i tshul can yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas te / phyin ci ma log par gsung ba'i tshul can gyi tshangs pa'i cho ga 'o // 'di ni slob dpon rTag pa'i rdo rjes gsungs pa gZhon nus bsgyur ba'o //

(39) 法頌注釈の伝統を云うらしいが、前半が理解不能である。

(40) テキスト nyid mtshams sbyor ba であるが nying mtshams sbyor ba

(*pratisaṃdhi) に訂正して読む。

- (41) 「双運」が明らかでない。上述された十二縁起の順観・逆観の双運をいうものか。或いは次に衆 (bde ba) の語が出るから密教的な大衆と空性の双運 (bde stong zung 'jug) であろうか。その場合はテキスト brtags pa を rtag pa と訂正して、双運の常衆は、と読むべきかもしれない。
- (42) テキスト bems po を bem po に訂正する。
- (43) テキスト tshangs pa'i cho ga を tshangs pa'i mchog (*brahmottara) に訂正。
- (44) 因縁心論及びそこに見られる龍樹の十二縁起解釈については梶山雄一博士の翻訳と諸論攷を参照 (梶山雄一著作集第五巻、中観と空 II, 2010, 第五章中観派の十二支縁起解釈; 同第八巻、業報輪廻と輪廻／佛教と現代の接点, 2011, 第一四章業報論の超越)。
- (45) 紙写本, 29.0 x 12.2cm. 片面のみに11行にわたり Devanāgarī で記されている。本文のみで、Bajracharya 教授所持本と異なり行間の数字や欄外余白の注記は全くない。
- (46) 以下に示すテキストは Bajracharya 教授所持本を底本として、NGMP (/C) P, E 1260/26 で若干の訂正を施したものである。本文中及び行間に記される数字は全て原写本にあるものだが、ダッシュ () や括弧 () は区別のために筆者が付した。各語の上に記された数字はマージンの注記に対応し、語の下の数字は十二縁起の支分の順番のようである。なお、写本の解説やネパールに於ける法頌信仰につき種智院大学講師スタン・シャキャ博士より有益な助言を頂いた。記して謝意を表する。

[recto]

Om namo Buddhāya //

// ye dharmmā hetuprabhavā hetu (sic) teṣāṃ tathāgato hy avadat
teṣāṃ ca yo nirodha evaṃvādi mahāśramaṇaḥ //

// atra vyākhyānaṃ kriyate // ye dharmmāḥ katamā saptadharmāḥ //

1	2	3	4	5
vijñānaṃ	1 nāmarūpaṃ	2 ṣaḍāyatanaṃ	3 sparśa (sic)	4 vedanā
(3)	(4)	(5)	(6)	(7)

6	7
---	---

jātiḥ 6 jarāmarāṇaś (sic) ceti // ime saptadharmmāḥ /// hetuprabhavā

(11)	(12)
------	------

iti hetubhyaḥ saṃbhavantīti hetuprabhavāḥ // hetu katame

1' 2' 3' 4'
 pañcahetavaḥ // // avidyā 1 tṛṣṇā (sic) 2 upādāna 3 saṃskāra 4
 (1) (8) (9) (2)

5'
 bhavaś ceti 5 //
 (10)

ime pañcahetavaḥ // **tathāgato hy avadaḥ** iti // **teṣāṃ** ca saptānāṃ dhar-
 mānāṃ • pañcānāṃ hetunāṃ • tathāgato hy avadaḥ // yathā 'titāḥ pra-
tyutpannāgatāḥ (→pratyutpannā anāgatā) gatā gacchanti gamiṣyanti ca
 tathāgatān (→tathā gatāḥ?) jānātīti tathāgataḥ // hi-śabdo niyamārtho na
 śrāvakaḥ pratyekabuddhadeśita eka evaṃ (→eva?) buddhasaṃbandhā-

*B. sparśaḥ *B. buddhaṃ

[verso]

vabodhād iti // **teṣāṃ ca yo nirodhaḥ** te khalu (→teṣāṃ?) dharmmānāṃ
 hetunāṃ yo nirodhaḥ vyupaśamanirvāṇau mokṣaspaṇḍaḥ // evaṃvaditaṃ
 śīlaṃ yasya sa **evaṃvādī mahāśramaṇaḥ** // mahān iti pradhāna uttamo
 varaḥ śreṣṭha ity arthaḥ // śramaṇa iti śamitapāpatvāt śamitakleśopa-
 kleśatvāt śramaṇaḥ // tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddha ity arthaḥ //
 sāksātkartavyaḥ deśayitavyaḥ bhagavān yad upadeśayati jarāmara-
 ṇaparidevaduḥkhadaurmmaṇasyaupāyāsebhyaḥ sa pariñcyate (→par-
 imucyate?) // yasmād yad^{grahaṇa} tasmād iha yatnaḥ karaṇīyaḥ ta evaṃ
adhyette nirvāṇaṃ yo nirodha upaśamanirvāṇaṃ paramaṃ sukhaṃ iti //
Ye dharmā-tikā samāptā //

[*この後に異なる手のネワール文字で以下の別テキストあり om̐ namo rat-
 natrayāya // namo āryyāvalokiteśvarāya bodhisattvāya mahāsattvāya
 mahākāruṇikāya // tad yathā // om̐ vīre vire... // また左右マージンに不明
 の文章あり]

B, grasaṇa B, adhyete B, -nirvāṇa

marginal notes [recto]

1 (vijñāna 6) cakṣurvijñāna 1 śrotra- 2 ghrā 3 ji 4 kā 5 ma 6 //1//
 [bottom margin]

[2] (nāmarūpa) nāma 4 dhā // vedanā-skandha 1 saṃskāra 2 vijñāna 3
 saṃjñā 4 // rūpaṃ 4dhā (//) pṛthvī-dhātu 1 āpa 2 teja 3 vāyu 4 //2//
 [bottom margin]

3 cakṣu • śrotra • ghrāṇa • jihvā • kāya • mana [/3/] [right margin]

4 sparśa 6 dhā // cakṣusaṃsparśa 1 śro 2 ghrā 3 ji 4 kā 5 ma 6 //4//

[bottom margin]

(5 vedanā 6) cakṣusaṃsparśatovedanā • sukhā • duḥkhā • asukhā'duḥkhā
1 śro 2 ghrā 3 ji 4 kā 5 ma 6//5// [bottom margin]

(6 jāti) svasvakarmānūrūpata jāti skandhānāṃ prādurbhāva jivitendri-
yānām utpatti//6// [bottom margin]

7 jarāmarāṇaṃ sugamaṃ [saṃyakdṛṣṭi 1 saṃkalpa 2 vāk 3 karmānta
4 ājīva 5 vyāyāma 6 smṛti 7 samādhyādi 8] [right margin]

[1'] (avidyā) 45 padārtha adarśanam anabhisamayasrtha sa ṃmohaḥ//
1'// [left margin]

[2'] (tṛṣṇā 6) rūpatṛṣṇā 1 śabda 2 gaṇḍha 3 rasa 4 sparśa 5 dharma
6//2'// [left margin]

[3'] (upādāna 4) tṛṣṇopādāna 1 kāmopādāna 2 śīlavratopādāna 3 āt-
mavedanopādāna (sic!) 4//3'// [left margin]

[4'] (saṃskāra 3) kāyasaṃskāra 1 vāk 2 citta 3//4'// [left margin]

[5'] (bhava 3) kāmabhava 1 rūpabhava 2 [left margin] ārūpabhava 3
tatra kāma 5 dhā// naraka 1 tiryak 2 preta 3 asura 4 manuṣyāḥ
kāmaṇīyaś ceti 5// rūpabhava 18 brahmakāyika 1 brahmapurohita 2
brahmapārśadya 3 mahābrahma 4 paritābhā 5 apramāṇābhā 6 āb-
hāsvarā 7 parittasubha 8 apramāṇāsubhā 9 śubhakṛtsnā 10 anabhrakā
11 puṇyaprasavā 12 bṛhatphalā 13 avṛhā 14 atapā 15 sudṛśā 16 sudar-
śanā 17 akaniṣṭhāś ceti 18// ārupadhātu 4 dhākāśānantyāyatana 1 vij-
ñānā 2 ākiṃcanyā 3 naivasa ṃjñāsaṃjñā 4//5'// [bottom margin]

[verso]

[top margin]

triparivartam ity atitānāgatapratyutpanna ṃ// atitāj janmano varttamā-
naṃ varttamānāj janmano 'nāgataṃ eṣāṃ madhye sarvatrā'ntarā
bhavati// sa cāvidyādidvādaśā ṃgakavalito 'nādyā'vidyāvāsanavaśāt//
tenaivātītādijanmani kleśān utpādayati// avidyātṛṣṇopādānalakṣaṇān / ta-
taḥ karma saṃskārābhaṇalakṣaṇam// tato janma vijñāna 1 nāmarūpa 2
ṣaḍāyatana 3 sparśa 4 vedanā 5 jāti 6 jarāmarāṇa 7 lakṣaṇaṃ// tathā
coktaṃ// kleśāt karma tato janmeti//

(47) この最後のパラグラフはテキストに明らかに乱れがあるが、概ねこうしたこ
とを云おうとするものと思われる。

(48) 上注(5)に挙げた酒井論文には、以下の密教的な縁起經典三点が訳出、論評さ
れている): Tohoku No. 212=520=980 *Ārya-pratityasamutpāda nāma*
mahāyāna-sūtra; No. 521=981 *Ārya-pratityasamutpāda-hṛdaya nāma*; No.

519=979 *Ārya-pratityasamutpāda-hṛdaya-vidhi-dhāraṇī*。同じく那須論文は、このグラニ化・心呪化の過程を諸文献及び考古資料から跡づけている。一方、四諦を説く転法輪経 *Dhammacakkhapaṭṭana-sutta* が上座部仏教圏でパリッタ (paritta 護呪) として現在に至るまで呪的用途に用いられているのはよく知られている事実だが、四諦或いは四諦を説く経典が刻文として呪的崇拝の対象となっている例は、縁起経典や法頌のような多数の報告はないようである。管見では、パーリ文で四諦が刻文された南ヴェトナム出土の土製奉献板が Skilling [1999] に紹介されている。また大乘経典中で四諦が神呪化されている興味深い例が明神洋氏によって報告されている (明神, 陀羅尼呪の成立について―『大集経』を中心に―, 東洋の思想と宗教第8号, 早稲田大学東洋哲学会, 1991)。同氏によれば、竺法護訳宝積経密迹金剛力士会 [大正11, p. 58] に「四天王諸天復呪曰伊泥・弥泥・多閉・多多閉・維蘆 (ドラヴィダ語で説かれた四諦の音写), 救一切衆生, 是即名曰苦習尽道法」とあり, これは佛陀がドラヴィダ語で四諦を四天王中の二王に説いたという有部系の伝承 (大毘婆沙論 [大正27, p. 410], 十誦律 [大正23, p. 193], etc.) にもとづくという。

- (49) なお, NGMPP により撮影されたマイクロフィルムの中には, 他に少なくとも二点の縁起法頌註釈文献がある: E 1368/5 (Running No. E 26821) *Ye dharmā gāthā* [*Ye dharmā ṭīkā*]; E 3350/4 (Running No. E5471) *Ye dharmā ṭīkā*。この二点は基本的に同一のテキストであり, いずれもサンスクリット文の法頌とその注釈がネワル文字で記され, 更にネワル語の詳細な複註が加えられている。法頌に対し密教的色合の濃い四通りの解釈を与え, 最後に法頌がアーリヤー韻律 (*āryā-vṛtta*, *āryā-chandas*) であることを明示する。どちらにもコロフォンがないため矢張り著者・年代は不明であり, インド撰述の本文にネワル学僧が複註を加えたものか或いは本文・複註共にネワル撰述なのかも現在の筆者には判断できない。内容の検討も含めて今後の課題とし, ここでは資料の存在を記すにとどめる。

キーワード 縁起法頌, 法身偈, 法身舍利, 四諦, 十二縁起, *ye dharmā*

[illegible]